
異世界

刹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界

【著者名】

刹音

N2393M

【あらすじ】

突然部屋に出た謎の少年に強制連行され、連れて行かれた世界。
その世界で優空を待っていた真実は 。

第一話

窓の外から小鳥の鳴く声が聞こえる。

カーテン越しに暖かい日差しが私の頬を照らす。

今日はとてもどかな日曜日。

心身ともに疲れる学校に行かずには家の中でも体を休めることができるので大切な休日。

あー。出来ることなら明日も明後日も日曜日なういいの。^{。。。}まあ、現実的に無理な話なわけで。

私はベットの中で一人起きることもせずにグダグダと時間を過ぎ^{。。。}していた。

じぱりかわると、階下からお母さんの声が聞こえた。

「優空起きなやご。 もう朝よー」^{ひが}

モゾモゾと手だけ動かし頭上の棚にある時計を掴んだ。

今の時刻・・・10:56分。

・・・母さんや・・・今の時間は朝ですかい?

心で突っ込みつつ、もう少し寝ていたいと訴える心に鞭を打つて私はベットから起き上がった。

着ていたパジャマを脱ぎ捨て、ついでに下着もとつかえる。クローゼットの中からガサゴソと田当ての洋服を見つけ、引っ張り出して装着。ついでにヘアブラシで腰まである長い髪の毛を丁寧になでる。ヘアブラシでなで終わったら今度はクシに変えて髪の毛を上から下まで

「優空あー朝って書いたんでしょーつー起きないと朝」はん抜きよー。
ーーー」

お母さんの怒鳴り声が廊下から響き私の部屋に入つてくる。時計を見ると11：22分を示している。呼んでもなかなか降りてこない私にお母さんが痺れを切らしたらしい。

この間もそういわれて本当にご飯を抜きにされてしまった。

私は慌てて部屋を飛び出し階下へと向かつた。

第一話（後書き）

こんにちわ。刹音です。

今回初めてファンタジー？に挑戦してみましたが、ノリで書き始めた小説でこの先どうなるか私にも分かりません。長い目で応援よろしくお願いします。

第一話

リビングではお母さんが台所でお皿を洗っていた。

「お母さんおはよ」

「優空おはよ。朝食もつ置いてあるわよ」

この母は何が何でも朝を通したいのだろうか。

一人肩をすくめながら椅子に座った。テーブルの上には朝食が並べられていた。

んー。今日の朝食とやらは・・・ご飯、目玉焼きにタコさんワイ

ンナー。それと・・・何でしょつかねえこれは。

「あの・・・。お母さん?」

「なあに?」

「この・・・なんと表現したらよいか分からぬ液体はなんでしょうか?」

私はさも当然とばかりに食卓の場に置かれている、コップに入った液体を指差した。

「何つて。ただの飲み物じゃないの」

ただの飲み物?これが?

私の指差した液体は灰色に染まり濁っている。しかもよく見ると赤い・・・果肉のようなものまで浮かんでいる。これが本当にただの飲み物だというのか。

「・・・」の飲み物は・・お母さんの手作りでしうつか
「何言つてゐるのよ。当たり前じゃない」

「あ、やつぱり。

「・・・で、何と何を混ぜたら・・・こんな物になるの?」

「んつと。冷蔵庫の残り物」

「はあ!?」

「だつてえ。そろそろ傷んできてたし」

本当に・・・何を混ぜたのか気になる。

しかし、お母さんに聞いても冷蔵庫の残り物で終わるのだろう。きっとあるものを適当にミキサーで混ぜ合わせたのだ。ってか、そもそも痛んだ残り物のミッククスジュースを娘に飲ませるか普通。いや・・それよりも確認しなきゃいけないことは・・・

「お母さん。この液体飲まなきゃダメ?」

上田遣いで尋ねてみる。だが、お母さんからの返答は冷たいものだつた。

「当たり前でしょ。残したらもつたいないじゃない」

お母さんが飲め!と、つい言いかけた言葉を飲み込み、代わりにがっくりと肩を落とした。

いつまでもそうしているわけにも行かず、私は考え直してくれないかな、と仄かな期待を込めてチラリとお母さんを見た。そこには飲めオーラを発しているお母さんが一人。

・・・目が怖いデス。

仕方ない」というふうに優空は液体を見つめた。しばらくその液体をにらめつこしていただが、お母さんの視線に耐え切れず、恐る恐るその液体に手を伸ばし、口に運ぶ。

「~~~~~!?!?!?!?!?」

不味ハ不味ハ不味ハ不味ハ!!! ありえなハモジニ不味ハ!!!

今まで生きてきた16年の中で飲み込めないほど不味い液体なんて
刃かでござる!?

こんなにも不味いものでも、飲まなかつたら何を言われるか分から
ない。

優空は口元を押さえ、必死でその液体を飲み込もうと頑張った。しかしついに我慢できなくなりダッシュでトイレに駆け込む。

しばらくしてトイレから戻ってきた私を見てお母さんは笑つていつた。

「優空は断る」と覚えなきやね

ああ。お母さんの背中に黒い羽が・・・。

そんな幻覚を感じつつ、私はテーブルに戻り手をつけていない朝食・ていうか昼食を口に運んだ。

もちらりお母さんが笑顔で進めるあの液体を幽固摺召して飲むなが
つたのは言つまでも無い。

+++

「・・・はあ」

優空は自分の部屋に戻るための階段を上りながらため息をついた。理由はお母さんのせいだ。あの性格は天然なのか計画なのかまったく分からぬ。いや・・・あれで天然といつたならこの世界のどれだけの人が天然に指定されてしまうのだろう・・・。

くだらないことを考えながら部屋の前まで着いた優空は特に何も考えることなくドアを開けた。

ドアを開けた先・・・自分の部屋の中には私と同じ年くらいの少年がいた。何で・・・？

「・・・」
「・・・」

部屋の中にいた少年と見詰め合つこと数秒。

「・・・失礼しました」

パタン・・・と、逃げるように優空はドアを閉めた。

・・・落ち着け、自分。さつきの液体には幻覚作用があるんだ。

そんなことを本気で思つてゐる時点でどうかと思うが、それで無理やり自分を納得させてもう一度何事もなかつたかのようにドアを開け

た。

—

卷之三

やはり、居る。いや・・幻覚だから見える？？

優空は一つ大きく深呼吸をして、その幻覚をじつと観察した。座っているから身長は定かではないが、私よりも上だと思う。男のわりに整った顔で、色白な肌。黒々とした髪を肩ほどまで伸ばして、一言で言えば結構かつこいい・・王子様系の幻覚だった。

「幻覚にしどくの惜しいな」

「なつ・・・! ?」

驚いた・・。幻覚が喋った！！

・・・
事実は小説よりも奇なり
・・・
か。

「おー。俺はお前に用があるんだ

幻覚はスッと立ち上がり私の方に近づく。幻覚なのに歩くことまで可能なのか。と、感心して見ていくといきなり手首をつかまれた。

「・・・・・痛・・・」

げ・・・幻覚つて・・・こんなにも凄かつたのか・・・。

じつと少年の幻覚を見ていると、その幻覚はいぶかしむように眉を

よせ私に尋ねてきた。

「お前が・・・本当にレーギス様なのか？」

・・・・・はあ？

何が言いたいんだこの幻覚は。レーギス？？何それ？？？？

きつと私の頭にハテナマークでも浮かんでいたのかもしれない。幻覚はあきれたようにため息をつき、私の手を離した。

「・・・何かの間違いか・・・いや・・・しかしそんなことが・・・」

ブツブツと何かを言つている。

・・・大人気ないとは思う、が。その態度にちょっとムカッ。

人の部屋に勝手に現れた幻覚のくせにチラチラこっちは見て深くため息をつくなんて考えられない。常識を考えてありえない。・・・幻覚に常識を求めてもいけないのだろうか。

悩んでる私にいきなりその幻覚は声をかけてきた。

「おい、そこの 」

はい？いきなり私のことを、そこの、と呼ぶんですか。本当に・・・幻覚のくせに生意氣な！――

心で落ち着けと何回も唱えたが、もう遅い。アレだ。俗に言う堪忍袋の尾が切れたって感じ。

気づいたら私はその幻覚に向かつて大人気なくも怒鳴りてしまつていた。

「あ・の・ねえ！なんで私の幻覚なんかに、そこの、呼ぱわりされなきやいけないわけ？私にはね、歴とした優空つて名前があるのよ！……私の幻覚のくせに生意氣な口利いてんじやないわよ……」

一気にまくし立てたせいか、すこし息が切れるのを感じた。

部屋の中には私の荒い呼吸音のほかに音はなくなりシンとした静寂の空間を作っていた。

その空間を壊すようにしてその幻覚は言つた。

「・・・喚くな」

その声がとても静かで冷たかったから、私は一瞬だけ本当に怖くなつた。

でも、結局は幻覚。怖気づく」などなんてない。だから文句の一つでも言つてやるうとした、その時。

「優等生？何大声出してるのよ。近所迷惑でしょう？」

お母さんの声が聞こえた。階下からじやない。部屋の前からだ。・・つて、ちょっと待て、いつ部屋の前に来たのだ。

「もう。なんで無言なの？入るわよ
「だつ・・・」

駄目！と言おうとしたがもう遅い。お母さんはすばやくノブを回しドアを開けると、ヅカヅカと私の部屋に入ってきた。
部屋の中には私と少年。年頃の娘の母がそんな状態を見たら何を思うのか。

「あ・・・あの・・・これはには事情が！…」

あわあわと言い訳を考えていたが、すぐに戻つべ。

そう、少年は私の幻覚なのだからお母さんに見えるわけがない。
この部屋には私だけで、ほかに何もないことを確認したお母さんは
私に一言二言小言を言つて部屋を出て行くのだ。

よかつたあ、と一安心した私は、お母さんが小言を言つて去るときを待つた。

すぐにお母さんが私に話しかけてきたが、内容は私の期待したもの

とは大幅に違っていた。

「あー。お友達が来ていたのなら行ってくれればよかつたのに~」

・・・え。

「お・・お友達?」

私は冷や汗をかくのを感じながらお母さんに聞いた。お母さんは何言つてゐるのという風に私を見た後、幻覚を指差して、お友達でしょ?と、逆に問い合わせてきた。

なんでお母さんに私の幻覚が見えるの??
いや、それよりも、こんな口の悪い幻覚とお友達だとこいつのを訂正しないと~

もつと考えることがあつたはずだが、そこまで頭が回らなかつた私はすぐにお母さんに訂正を入れようとした。だが、私がお母さんに訂正しようとはなしかけるよりも早く、幻覚はお母さんに近づき深々と頭を下げた。

「はい。僕は学校の友達なんです。今日は勉強を教えるために來たんですよ。でも僕の教え方が悪かったのか彼女が怒つてしまつて・・・

・。迷惑をかけました」

いきなり何言い出すんだこの幻覚は!普通信じられないでしょ!いりこり疑問点が・・・

「まあ、優空に勉強を教えてくれてたのね。いつも勉強しない子だから困つてたのよ~。」(の際だからみつちり勉強教えてあげてくれるかしり~)

・・・・信じちゃった。

「はい。そのつもりです」

幻覚にいらないことを喋つて勉強を見るように頼んだ天然のお母さんに、大丈夫ですよとでもいうかのよつに微笑んでいる少年。その微笑みはまるで天使のようだつた。

女の私よりも絶対に可愛いぞ、あれは。

優空は少しむつとしながら、楽しそうに話す一人の会話を聞いていた。

その会話の内容でお母さんの天然ぶりは異常だということが改めて確認できたとして、私がびっくりしたのは幻覚のほうだった。先ほどまであんなに口が悪かったのに、今では優等生のよつに優しい口調でお母さんと話をしている。

・・・この幻覚・・二重人格かよ。

優空は一人の会話を聞きながらそう一人そう考えていた。

第五話

+++

数十分あの一人話していただろうか。ようやくお母さんは私の部屋を退出した。すると、先ほどの賑わいとは打って変わつてまた静寂な空間がうまれた。

・・・なんか、気まずい。けど、私がどうにかしなきゃいけない問題じゃないよね。

あくまでも幻覚は幻覚。本来一人しかいない部屋は静かで当たり前なのだ。

私はふうっとため息をつきながら近くの椅子に腰掛けた。すると、それを見計らつたかのように幻覚は話し出した。

「横槍が入ったな。まあいい。俺はお前に用があるんだ」

さつきまでの優等生な口調と天使の微笑みはそこにはなく、冷たい目が私をとらえているだけだった。

「・・・・・」

その目があまりにも冷たく、冷酷なものだから、私は何も喋ることができなかつた。

「やつ。黙つて聞いていてくれれば良い」

そう言つて、幻覚は私の足元を指差した。

「そこ」の箱を取ってくれないか。お前さつき何か喚いてとらなかつただる」「

私が足元を見ると、そこには半透明のオルゴールのような形をした箱のようなものが転がっていた。

ああ。あのときの、そこのは私のことじやなくてこの箱を指していたんだ。

私はそれを拾い上げ幻覚に渡した。幻覚は一言ありがとうといつて箱を受け取った。

・・・お礼とか・・いえるんだ。

私は少しだけ驚いてしまつた。そんな私を気にする様子もなく幻覚は箱を弄びながらたんたんと話し始めた。

「一言先に言つておく。もう分かっているだろうが、俺はこの世界の人間じゃない」

ええ。分かつていますとも。君は私の幻覚・・・。

「・・・幻覚でもないからな」

まるで私の心を読んだかのように『自分は幻覚じやない』と言つた。幻覚じやないなら、なんなんだ?と、当惑顔の私を見て田の前の幻覚・・・じゃなくて少年はため息をついた。少年からしてみれば今までのことを直接近くで見ていて、未だに幻覚だと思うような人間がいたことに呆れていたのだ。

「・・・俺はクリュスタルスという世界から来た。理由はフイーリア様の妹君、レーギス様を連れ戻すためだ」

この人の頭は大丈夫だろうか。

私には、さらつとありえない嘘を言う少年の頭が心配だった。しかし、異世界の人だというのならきなり私の部屋にいたことには説明がつく。

でも、仮に本当の事を言つてるにしても・・・分からぬ。それがそうして私とつながるのか。それならこんなところにいないですぐにそのなんたら様を連れ戻せば良いだけだ。私が関係していくところなどどこにもない。

「あの、それって私関係ないよね？なんたら様なんてここにいないし」

「なんたら様じやない。レーギス様だ。いいか？俺が関係ない場所に来ると思つのか？」

そう聞かれても、君のことよく知らないし。

私は目をつぶつて今までのことを思い返す。この部屋で少年と会つて1時間弱ほどの時間しかたつてないが、自分の目的に関係ないとこりで道草を食つようやつじやないことにほんづく。

「よく聞け。レーギス様は幼い時にクリュスタルスからこの世界へと産み落とされた。意味が分かるか？」

まったくもつて分からぬ。分かつことといえば、この少年は態度が悪く、私を上から目線で見ているということだけだ。

私の顔を見てそれを悟つたのだろう。少年は眉間にしわを寄せながら言った。

「俺のようこそ異世界から異世界へ飛んだわけじゃない。レー・ギス様はこの世界で産まれたんだ。・・・少し意味は違うが・・・生まれ変わりといえばわかるだろ?」

「ここまで聞いて、さすがにこよつといやな予感がした。まさか・・・とこづ思考と、そんなことありえない。といづ思考が頭の中を支配する。ただの予感なのだが、いやな予感ほど当たるものなのだ。今回のことやな予感もその例の通りだった。

「つまり、お前がレー・ギス様なんだ」

第六話

少年は私の顔を見て真顔で言った。私の目を見つめるその瞳を見れば嘘を言つていないとは容易に分かった。ただ、私はそれを認めることができなかつた。

「あ、あらえないと。それに私、レーギスつて名前じゃなくて・
・」

「優空はこの世界の名前だ。この世界の名前など関係ない」

その言葉に、ちよつとだけムツつとなつた。産まれた時に私に『えられた名前を否定することは、私自身をも否定されているようでならない。

「私の名前は優空だよ。私にとってはレーギスつて名前のほうが関係ない」

私の言葉に少年は黙つた。先ほど言つた言葉が失言だつたと分かつたのだろう。少年はしばらく黙つた後、ゆつくりと口を開いた。

「・・とにかく、俺はお前を連れて行く義務がある」

そう言つ少年の口調はどう聞いても上からものを感じでイラッときたが、その少年の目はどこか憐れで困つてゐるようにも見えた。

そんな顔を見てしまつたから、私は何も言い返すことができず、黙つて少年を見つめた。

「異世界の人間に口で言つても無理だろうな

少年は先ほど私が拾い、手渡した箱を私の手に持たせた。

「??」

もちろん、私に少年の意図が分かるはずもない。

私は箱を持ったまま、少年の行動を待つた。

「その箱はフェネストラというんだ。箱を開ければ俺の暮らす世界、クリュースタッ尔斯が見える。俺の今までの話を信じる、信じないかはそれを見て決めろ」

少年が話し終えた後、私は自分の手元の箱を見つめた。そして、その箱をゆっくりと開けた。

瞬間、箱から白い光があふれ出し、あつといつ間に私の部屋を包み込んだ。見渡す限り白白白。家具なども見当たらず、その白の空間には私と少年しかいなかつた。

「どうなってんの?これ
黙つてろ。そのうち分かる」

少年は私の顔を見ず、まっすぐに前だけを見て返事を返した。

それ以上何かを言つても無駄だと悟った私は、少年の言つ通りに黙り込んだ。少年の言つことを聞くのには抵抗があるが、ここでのうるさくしてはどうなるか分かつたものじゃない。せめて、文句を言つのはこの白い空間から開放された時にしたほうが賢明だろう。

そんなことを考えつつ、しばらく待つてみると白い空間にいつせいに色がつき始めた。

息を呑んでその光景を見ていると、その色はある景色を映し出した。

「・・・これは」

「これが・・俺たちの住むクリュスタルスだ」

その景色はとても寂しかった。

空は薄い灰色に染まり、地面には草木がところどころにしか咲いていない。

「・・・なんか、寂しいところだね」

「昔はこんなふうじゃなかつた。もっと綺麗な場所だつたんだ」

私の言葉に、少年は少しつづみ加減に言った。その少年の姿がこの景色と同じく寂しげで、私はそんな少年の姿を見たくないと感じながらも、少年から目を離すことができずにいた。

私の視線に気づいたのか、少年は顔を上げて私のほうを見た。私は何を話せばいいのか咄嗟に考えられず、黙つて少年を見つめ返していた。

少年はそんな私を見て、フツと笑つた後、私の手の中にある箱をゆっくりと閉じた。

箱を開じると白い光が出てきた時と同じように、目の前の景色は箱の中に吸い込まれ、私は何の変哲もない自分の部屋の中に立つていた。

しばらくその状態でボーッとしていると、少年がすかさず私に聞いてきた。

「どうだ？ 信じる気になつたか？」

信じる？ 信じない？ と、問われれば信じるといつしかない。あんな

ものを見せられて、信じないなんていえるわけがないのだ。
沈黙は yes と捉えられ、少年は私に言った。

「じゃあ、お前には今から俺とクリュスタイルスに行つてもいい

なにが「じゃあ」なのか教えてもらいたい。

確かに私は少年の話を信じた。でも、いく行かないかは・・・。

「あのせ、確かに君たちの世界があることは信じるけど、私がレー
ギスつて証拠があるの？」

「無い」

無いのかよ！――！

「なら、私がレー、ギスつて、いつのは何かの間違いじゃないの？」

「それは分からぬ。確かにお前のはずなんだが・・・」

少年はチラツと私を見て、深く深くため息をついた。

あああ。この反応何回目だろ？・・・。やつぱムカツク――！

「が、何なのよ？」

言葉を切つた先が気になり、私はその先をうように促した。少年
はやれやれというふうに肩をすくめていた。

「俺ははつきり言つて、お前がレー、ギス様だと信じられない」

「当たり前でしょ！私はレー、ギスじゃないもん。でもその信じられ
ない理由って何さ？」

「・・・まず、レー、ギス様はとてもおしとやか、物腰柔らか、言葉
遣いも申し分ない人だったのだが・・お前はガサツ、暴言吐き、短
気・・・などなど。全然似ていな」

初対面のやつにここまで言われる筋合いは無いのだが、確かにそれは当たつていて何も言い返すことができない。

「・・・でも」

少年はビシビシと言つていた口調を和らげ、やさしい口調で言った。

「お前から感じるのは雰囲気は、レー・ギス様に近い」

そのあと少年は馬鹿なことを言つたな、とフツと笑つた。その笑い方は自分を自嘲するような笑い方で見てて氣分のいいもののはずは無いのだが、その笑い顔を見ると、不思議と鼓動が高鳴るのを感じた。

「・・・話が流れたな」

「う・・・（チツ）」

「とにかく、お前はクリュースタッルスに行つてもうつ

少年の目に涙みがあり、私が何を言つても無駄だと言つことを示していた。

それでも私は最後まで抵抗を試みる。

「嫌。私は行く必要ないでしょ」

「必要あるか無いかは俺が決める」

「絶対に嫌！！」

しばらくはその言い争いが続いたが、やがて少年はふうっとため息をついて言い争いの場を降りた。私は一瞬本当に少年が諦めたのかと思い、嬉しさと呆気なさが入り混じった不思議な感情を抱き少年を見つめた。

しかし、もうひとこと少年が諦めてくれるはずも無い。

「・・・仕方ない」

少年は私に一步一歩近づいてくる。それに合わせ私も一步一歩あとづかる。

背中がガンッと硬いものに当たった。部屋の壁だ。もうあとづかることはできない。それでも少年は私に近づいてきて、私は完全に逃げ道を断たれてしまった。

どうしようかと考えてみると、ふいに少年が私の手をつかんだ。

「な・・何するのよ」

同年代の男の子に手を握られることが初めてだった私は、不本意にも少年にドキドキしてしまった。少年が握る手から私の鼓動が伝わるのではないかと言つぽひじこ、心臓がうるわくなっている。

・・・落ち着け、落ち着け、私の心臓つ

必死で落ち着きを取り戻そうとしている私に、少年はさらに追い討ちをかけた。少年は握った私の手を引き、私を抱きしめてきたのだ。

「ちょ・・っ!..」

少年の体温が布越しに伝わってくる。私の心臓はさうこうむるさく早く鐘を打つた。絶対に聞こえてしまっている・・・恥ずかしさで胸がいっぱい少年を突き飛ばすことなどを考える余裕も無かつた。少年はさうに私をギュウと抱きしめた。

・・・心臓が・つーーー

私の意志を反して早鐘を打つ心臓が少し恨めしい。

このままでは、心臓が壊れてしまつ。そつ本氣で思つてしまつほどに心臓がバクバクといつていて。

それでも私は心臓の鼓動を平常に戻そうとつとめた。しかし、そう簡単に戻るとは思えなかつた。そのとき、少年が私の耳元で囁いた。

「

」

その言葉は私には聞き取れなかつた。だが、なんとなくいやな予感がした。気づくと、体が熱くなるほどに早鐘を打つていた私の心臓は通常よりもゆっくりのペースで動いていた。

そつと少年の顔を見上げると、何かをやり遂げたような顔でうつすらと笑みを浮かべているように見える。

「ちよつと、今、いつたい・・・」

言い終わらぬうちに、私の部屋に異変が起こつた。私のすぐ後ろにある壁が大きく黒い口を開いたのだ。顔を後ろに向けて確認すると、それは穴のようでもあつた。

さきよりも強くいやはな予感がひしひしと伝わる。そして、例の「じ」とくいやな予感ほど当たつてしまう。

そう。少年は私を抱きしめた格好のままで、何のためらいも無く六の中へと身を投げ入れたのだ。

どれくらいこの時間が経つただろう。頭がぐるぐると回るような感覚がして気持ち悪い。

チラリと田を開けると、私のあまたの状態と同じよくながらぐるぐるな空間が辺りに広がっている。未だに入った穴から出でていられない感じ。

「ねえ、いつになつたら着くのよ？」

「もうすぐだ」

「一時間くらい前も同じ」といわれたんだけど

私の反論に少年は黙つた。

こうなると、少年はしばらく口を利いてくれない。

私は、はあつとため息つきながらぐるぐるとした空間を田に入れないうちに田を開じて、穴の中から抜けるのを待つた。

「 着いた」

ふいに少年の声がしたかと思つと、急に田の前が明るくなつた。田を開じてもまぶしいと感じるのはその明るさに、強く強く田をつぶり手で田を覆つた。

・・よし。これならまぶしくない！

そう考えた、丁度その時。いきなりの浮遊感が私を襲つた。いや・・・浮遊感と書つか、ポイッと投げ捨てられるよつな感覚に近い。

「~~~~~！」

叫ぶまもなく、私たちは空を飛び・・・落ちた。

ドスンという大きな音があたりに響く。打ち付けたお尻がジンジンと痛んだ。

うう・・と、半泣きになりながらもチラリと横目で少年を見ると平然と立つてこちらを見ていた。

「お前・・運動神経無いな」

「もつといたわる言葉無いのか！」

あー、もう。何でこんなに嫌な奴なんだ！

私はわざと大きくため息をついて地面から立ち上がった。そこで初めて、今いる場所が今までとは違う世界だと気づいた。空は白と灰色が混ざったような色で濁り、ところどころにある濁りの切れ端からすみれ色の空間が顔をのぞかせている。地面はあちこち浅いひび割れができていて、草木はまばらしかない。この景色を私は知っていた。

あの箱・・・フェネストラとかいうやつで見た景色とまったく同じだった。ということは、ここが・・・

「クリュスタッ尔斯？」

「そうだ。ここが俺の住む世界、クリュスタッ尔斯だ」

私の問いかけに少年はすぐに答えてくれた。そして、この世界がなぜこうなったかをたんたんと語りだした。

少年が話している間、私は始めてくる世界に興味を持ち辺りを見回していた。だが、360度どこを見回してもさびしい景色が続いているだけだった。

そのとき、遠くのほうになにかが光っているのを見つけた。私は目

を細めてその光を見つめた。

しかし、距離が離れているためかよく見えない。

「人の話を聞いてるのか？」

私の意識が別のものに向いてることに気づいた少年は私に問い合わせてきた。そして、すぐに私が見つめているものが何なのか気づいたのだろう。

少年は私が見ているとこを指差して言った。

「今からあそこに向かうんだ」

一
え

私は光るものから田を離して少年を見た。
少年は私をじっと見て、同じことを繰り返した。

「今からあわいに向かうんだ」

指はしつかりと光っている場所を指す。

無理だ。と私は思う。なにせ距離がありえないほど離れているのだから。しかし、少年は田で早く行くぞという気迫を放つて私をにらんでいた。

歩いている気力と根性は持ち合わせていないのだ。
だが、私のことは私が一番わかっているつもりだ。私にあそこまで

「あのわ、現実を見なづかー。」だからあわいめてめっちゃ離れてる
うやうや。

ג' ט' ע' ט'

「あ、何か魔法みたいの使うとか？それでバビューンっと・・・
「使わない」

「・・・歩いていくの？」

「当たり前だろ？」

私の歩きたくないという願いを込めた言葉は、少年の冷たい言葉に簡単にあしらわれてしまった。

ハウツとため息をついてもう一度田指す場所を見る。

・・・やっぱり果てしなく遠い。

いつまでも泣っている私に憐れを切らしたのか、少年はこきなり私を抱きかかえ、まるで荷物を持つように肩にかついだ。

「うひやああ！？な・・・」
「すんのむー。」

「ひぬさい黙れ。喚くと落とす」

「落とす！？降ろすじゃないのー！？」

「・・・ひぬわー。」

喚いていないと、いきなり早くなった鼓動を聞かれるのではないかと気が気でなかつた。この鼓動が聞こえないようになるなら落とされてもいいからとも本気で思つ。体中が熱くて、とにかく早く降ろしてもらえるようにギヤーギヤーと喚いた。

しかし、喚けば喚くほど少年の周りの空気は暗黒化していくのを感じる。このままでは、ただ落とされるどころか落とされるにプラスしてなにか嬉しくないオフショングつきそうだ。

私は泣き泣き今の状況を受け入れ、少年の肩の上で少しでも鼓動が平常に戻るように深呼吸を繰り返していた。

+++

少年の肩に乗せられて暫くジッとしていたが、時間が経つにつれて腰辺りが痛くなってきた。伸びをしようにも少年の肩の上で、しかも痛い腰を押さえつけられているからできない。

せめて早く降ろしてもらひうことを祈るばかりだ。

・・・でも。

チラリと前方に目をやる。

光るものの大さはわざと変わってないようと思える。少年が本当に歩いてるのか疑わしくなるくらいに、近づいている気がしない。

「ねえ・・・今まで私は肩の上なのさ？」
「着くまで」

腰が居たくて早く地面に降りたい私に少年はさらうと酷いことを言つて精神的に地獄に落とした後、黙々と歩き続けていた。

そのまま、まっすぐに光る場所へ行つてくれるのならあと数分は我慢できたと思う。もちろん、数分で着くとは到底思えないし、数分後も少年の有無を言わせない気迫に負けて肩に担がれてる姿は想像できるわけだが。

「ちよっと、どこ行く気なのよ？」

少年は早足で黙々と歩いてくれていた。・・・別の方に向こうへ向いていった。

「お前、本当に馬鹿か？俺は行く場所を最初に言つただろう？」
「馬鹿はアンタだ！道思いつきり外れてるじゃん！…」

私が喚くと、少年は心底呆れたようにまたため息をついた。

「お前は本当に馬鹿になったんだな。目の前に目的地があるからといつてまっすぐ行けば着くというのか？お前は途中で道が切れたりしてるとか考えないのか？まっすぐ行つて着くとお前は分かるのか？ここに来たのも初めてのくせして？」

一気にまくし立てられ、私は何も言えなかつた。

いや・・・、何かを言おうとしても、少年の言つことは確かに正しいので何も言い返せなかつた、といつたほうが正しこかもしれない。

言い返せない悔しさでジタバタすると、腰を押さえつけてる手に力が入つた。

暴れるな、鬱陶しい。

無言でそう言つているのが分かる。

普通なら怖気づいて大人しくしてしまつところ。だけど、私はそうじゃない。

確かに気迫は確かに怖いけど、私を必要としているらしく「コイツが私に何かをするはずがないよね。

そう考えながら私は少年になんとか言い返せる言葉、困らせる言葉を探した。しかし、そう簡単に見つかるわけもない。

「とにかく、ここは世界は俺のほうが知っている。お前は黙つて俺にこじてきてくれれば良かったんだ」

私が考へている最中、少年はポツリとつぶやくようになつた。

その言葉を聞いたときは、あーだこーだと考え事をしていいたせいでも少年のつぶやきはあまり聞いていなかつた。しかし、少年の言葉になにか引っかかる部分があつたことにぽんやりと気がついた。

・・・・今の、違和感みたいななんだろ??

引っかかった部分がどうしても気になつて考へてみると、どうしても分からぬ。こんなことだつたら無駄なことは考えず耳を澄ませていれば良かつたのだと、ちょっと後悔するが、今さつきまで時間が戻れたとしてもきっとうだうだと考へてしまつたに違ひない。私はそういう人だから。

私は少年に今なんていつたのか聞くつとも思つたが、また馬鹿にされる気がして聞くのをやめた。

また私たちの間に会話は無くなり、静寂が辺りを包みこむ。その静寂を小さく壊すのは時折吹く風と少年の足音だけ。

本当に寂しこどりだと再確認してしまつ。

びつひつ、こんなに寂しいところになつちゃたのかな。

ここは世界に長く居れば居るほど、胸の中に疑問がたまつてこく気がした。

現に、私の胸の中には疑問がたくさん渦巻いていた。

第十話

疑問とつても、くだらないものばかりなのだけど。

「ねー・・・本当にいつになつたら着くのさー。方向間違つてたりしないよねー?」

何か会話をしようつと、悪態をつべよつとして少年に書つた。

「もつじき着く。間違つてない

少年はすまし顔でそつ答えた。

・・・・会話が続かない。

話していくこれほど会話が続かない人はこの少年が初めてだつた。

・・・コイツ、会話続けようとしてないな。

私がイライラとしてきたところ、少年が呟いた。

「今からこの先に行く。いいな?」

んー?と、唸りながら、私は少年の指差す場所を見た。

「・・・・・

私は何もいえなかつた。

私たちの目の前に、急な坂道があるわけじゃない。大海原があるわ

けでもないし、大きな岩が道をふさいでいるわけでもない。何も無いのだ。そう、何も。道すらも。

「あのわあ、道、あるの？」

「お前にはあるように見えるのか。頭大丈夫か?」

その言葉をそつくり返してやりたい。

田の前には道が無い。一歩踏み出せば間違いなく落ちてしまつだらう。それなのに、この先に行くといつ。道は無いといつのに。その先は下が見えないほど高い崖だといつのに。

私は今出来る」と・・・反抗を試みた。

「黙れ。ここから落ちたほうが近道なんだ！」

動はなくてまで早く行かなくていい

「 こねませんからー！」

お前だけ先に落とすぞ

「喚くな。そもそもお前に

「羨忌の二つ目」
いにがて、かんて歸りたる

「ふえん」

「出でうじての間には二度」とは

「アーリー・エイジング」

「おまは死んだら文句を言えはいいだろ。それともから俺が

は？何それ、ビリーヴ・・・

私が聞こいとしたとき、質問も待たず少年は私を抱いだまま崖に身を投げた。

私は落下していく怖さと、先ほどのコルの言葉に従いギュウッと皿をつぶつた。

それでも、落ちる時の勢には感じてしまひ。

果てしなく落ちていきながら、投身自殺はこれほど怖いものなんだな、これから先自殺するようなことがあれば投身自殺だけはやめておひへ。などと、くだらなうことを考えていた。

しばらく落ち続け、それから地面が近づくころだと思つた私は怖がりながらも叫んだ。

「死んだらアンタの元に化けて出てやる~~~~~！……！」

その声は虚しく辺りに響いた。

そして、私の体は地面に叩きつけられ地面には真っ赤な花が綺麗に開花・・・しない。気づけば落ちていく感覚も消えている。浮いている感じはするが。

目をつぶっているため、どうなつているのかわからないが・・・。先ほどまで吹いていた寂しげな風が肌に当たらなくなつた。風の当たりないとこりに来たというより、私自身が別の空間に移動したようだ。

そう。ここへ来たときの感覚とていている。

丁度その時、またあのポイツと投げ捨てられるような感覚が私を襲つた。しかし、すぐにまたふわつとした浮遊感に変わった。

「もういいぞ」

少年が呟いたかと思うと私の目を覆っていた少年の手が離れた。私はつぶつていた目をそっと開けた。力を入れてつぶつていたせいか、視界が少しほやけていたがすぐに直った。 目を開けて、足元に広がっている光景に私は驚き、息を呑んだ。

第十一話

「……、エーッ？ 私たち浮いてるの？」

私の足元には青白く光る城のよつなものがあった。地面や空は相変わらず寂しかったが、その城からは寂しさなど微塵も感じず、どこか人をひきつけるような魅力があった。

「ここは俺たちが住む城だ。今は上空から見てる。お前の言つとおり浮いてるということだな」

その返事を聞いた後、私は少年の服にしがみついた。少年はクックッと笑つた。

「お前、降りたいんじゃないなかつたのかよ？」

「だつて！ 降りたら落ちるじゃん！！」

半泣きになりながらもそつそつと、少年はまたクックッと笑つた。

「大丈夫だ。俺が浮いてる間はお前も落ちない」

「なんだ・・・じゃあ降りる」

「降りてもいいのか？」

私は少年の服から手を離し、腰に回つている手を解きにかかった。

なこを当たり前のことを質問しているのか。私はさつきから降りたいといつてゐるの。」

「降りるー。」

私がそうこうと、少年は何の前触れもなく手を離した。

瞬間、私は落ちるような感覚に襲われはしたが、少年の言ひとおり地面に落下なんてことはなかつた。

びくびくしながら立つと立つた場所が結構安定していることに気づいた。浮いているというよりも透明なガラスが宙に浮かんでいてそれを上にいるようだつた。チラリと自分の足元から下をみると、地面からの高さに少しだけクラッとした。そんな私を少年はサッと支えてくれた。

一応礼を言つと、少年は笑つた。
その顔はとても優しかつた。

「コイツ、私にあんな態度とるナビ本当は優しくていいやつなんだろうなあ。」

私が一人でそう思つていると、少年は伸びをしながら私に言つた。

「そろそろ降りるか
「うんっ」

ちょっとだけ元気になつていた私は少年に向かつて笑顔で返事をした。

・・・その時、見つてしまつた。少年がニヤリと黒い顔で笑つているところを。

「・・・あの?」

笑っていた顔を引きつらせながら少年を見ると、少年は何も言わず、右手を胸の前に持ってきて指をぱちんと鳴らした。

途端に足元にあつたガラスの上にいるような感触が消えた。

私と少年は重力に逆らうことなく落ちた。

落ちている間に重たい頭が下になり、地面が近づいていたことが良く分かった。

「・・・・・」

地面がすぐ目の前に迫り、私はもうダメだと諦めギュッと目をつぶった。すると、予想していた痛みはなく、体が何かに包まれているような温かさがあった。

頑なに閉じた目をそっと開けると、地面との距離は5cmに満たないだろう辺りだった。

とりあえず、死んではいない・・?

ホッとしたところで、いきなり包み込んでた温かさが消え、私は5cmに満たない高さから地面におちた。
いくら5cm以下だといっても、不意打ちでしかも顔面をぶつけたのだから痛い。

「ううう・・・」

ぶつけた鼻をなでながら体を上げると、何よりも先にお腹を抱えて必死に笑いとかみ殺している少年の姿が目に映った。

「ちょ・・・・、何笑つてんのさ!――」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしながらもけんか腰に言つと、少年はそ

んなの気にする様子も無くまだお腹を抱えていた。

「お、お前つて本当に運動神経無いんだな」

ああ、運動神経無い私を見るのがそんなに楽しいのですか。そういうですか。へえ・・・。そもそも私がこんな目にあつてゐるのって、全部・・・

「お前のせいだらうがああーーー！」

私の叫び声と、少年のかみ殺した笑いが辺りに軽く響く。

・・・もっ、やだ。無理やりつれてこられたのにこんなに笑い飛ばされるなんて。

そう胸の中で考えて、はたと気づく。

少年が笑ってるのだ。さつきも、今も。かみ殺しているとはいえ声を出して。

これって、結構貴重？

あんなに怖い冷たい顔をして、無言を言わざるべくつれて來たやつが子供のように笑うなんて信じられなかつた。

笑われている恥ずかしさにより少し胸がムカムカしたが、少年の無邪気な笑い顔を見ていると口でうまく説明できないが、ほわあつと胸が温かくなるのを感じた。

何故だかは分からぬけど、私が知らない少年の顔を見れたことがとてもとても嬉しく思えた。

第十一話

地面に無事着地？した後、笑う少年を小突きながら私は田の前のお城に見とれていた。テレビとか写真とかでヨーロッパとかのお城を見たことはあった。お城なんてどれもあんなものだと思っていた。しかし、目の前にあるお城は今まで見たお城よりもシンプルな美しさで輝いていた。

多様の色を使い、煌びやかに装飾されたお城ではなく、無駄な飾り、色をすべて取り除き建てられたそのお城は内面から輝いているようだった。

「すうい・・・綺麗なお城だね」

「ああ」

少年は子供のように笑った。

「君つて子供みたいに笑うんだね」

さも意外そうな顔でそういうと、逆に少年に小突かれてしまった。

・・・ん？

そこで、本当に今更ながら気づいた。

私はまだ、少年の名前を知らなかつたのだ。

「ねね、君の名前つて何なの？」

「は？」

「名前だよ。な・ま・え。私に優空つて名前があるよつて君にもあるでしょ？」

「今更だろ」

「確かにそうだけどー！」

教えてくれる様子を見せない少年に、不満げに頬を膨らませた。しばらくそうしていると、少年は折れたのかはあつとため息をついた。

「・・・コルだ」

「コル・・・ねえ。なんか、ちょっと可愛い名前だね」

私は本当に悪気は無く、ただ思った感想を素直に口にした。すると、殺氣のよつた冷たい視線が少年・・・コルから向けられていることに気づく。

どうやら、コルは自分の名前を気に入っていないらしい。

・・・せっかく可愛い名前なのに。本人がこんな人じやなあ。

「俺は男だ！可愛い名前なんか付けられたくないねえし。俺はもともとこんな性格なんだよ！！」

「なんで私の思つてることが分かるのさ！？」

ビシッと突つ込みながらコルの様子を見る。怒った様な口調ではあつたが、顔はほんのり赤く染まっているし、むきになるところが最初会つたときには想像できないほど子供らしくて全然怖くない。

そんなコルを見て、私は声を上げて笑つた。

ここへ来たときは、不安と恐怖とその他いろんな感情でいっぱい何かを楽しむなんて出来なかつたし、コルがいなかつたらこんなに楽しく笑えなかつたと思つ。いや、本当にいなかつたらここへくることも無かつたのだけど。

おなかを軽く抱えて笑いながら家にいたときからおじゅねまへこの場所に来るまでのことを考えていると、ここに来てからコルがいきなり優しくなったというか、硬いイメージが崩れたというか。やわらかくなつた気がした。

それはたぶん。本当に、コルの故郷に帰ってきたからだと思う。自分が知つてているところで、心の中で安心してゐんじゃないだろうか。わかんないけど。

今回、コルは私の思つてゐることに気がつかなかつたのか、今も無言で冷たい視線を私に送つていた。

第十二話

まだ怒っている様子のコルに引っ張られながら、私はお城の中に入つた。

お城の中も外見と同じくシンプルで無駄を一切取り除いたようだつた。

お城というものはもつと絢爛豪華でキラキラしているものだとばかり思つていたから、私は面食らつてしまつた。

「なんにも無いんだね」
「言い方が失礼だな」

コルはさつきから私に目をあわせようとしない。
かわいいといったことを根に持つてゐるのだろうか？心の狭い男だ。

「 着いたぞ」

ふいにコルが静かな口調で言った。
そこは、どこかの部屋の前だつた。重そうな扉が目の前にあり、何か厳密な雰囲気が漂つてくる。

「フィーリア様。ただいま戻りました」

コルがその扉に向かつて声をかけると、一瞬の間を置いて返事が返つてきた。

「入つてきてくれさい」

その声を聞いたとき、私は自分の耳を疑つてしまつた。

聞き覚えのある声だつたからだ。

私がどこで聞いたのかを必死に思い出そうとしている様子を気に止めることなく目の前の扉に触れ何か呪文のよつなものをボソボソとつぶやいた。

すると、重そうなその扉は軋みながらゆっくりと開いた。

完全に扉が開くのを見届けた後で、コルはツカツカと部屋の中へ入つた。あわてて私もそれに従う。

私が部屋に入ると、それを待つていたかのよつに扉はひとりでに閉まつた。

そこで改めて部屋の中を見回した。

大きなホールのようなその部屋には中央によく分からぬ魔方陣が描かれており、それを囲むようにして等身大より2回りくらい大きな柱が8つ立てられている。その柱の上には不透明な大きい黒い玉のようなものが乗つかつていた。

そしてその魔方陣の中心部に、一人の女性が立つていた。コルの言つていたフイーリアという人だろう。

私たちに背を向けるようにして立つているため、顔は見れない。

「フイーリア様、レーギス様と思われる人物をお連れしました」

コルがそういうと、フイーリアはゆっくりと私たちのほうをみた。

「

フイーリアの顔を見たとき、私は正直心臓が止まるかと思った。目の前にいるフイーリアの顔は私の顔と同じだったからだ。

私が啞然としてフイーリアの方をみていると彼女はニヤリと笑い、私と同じ顔で、私と同じ声で静かに言った。

「お帰りなさい。わたしのカラダ」

その言葉を聞いたとき、私は言いようのない恐怖に襲われた。体は力た力たを小刻みに震えだし、この場から逃げたいと思つても、足がすくんで動くことさえままならなかつた。

そんな私を見て、彼女は「ヤーヤと笑いながら一歩一歩」ちらりに向かつて歩き出してきた。

「いやあああああつ」

私はやつとの思いでのぞの奥から声を出し、頭を抱えてその場にしやがみこんだ。

「おい、どうした！？」

すぐにコルが私の隣にしゃがみ、声をかけてくれた。私はコルの着ている服のすそをつかみ、じつとしていた。

「大丈夫ですか？」

頭の上から、声をかけられた。私と同じ声でもなく、コルの声でもない。

ゆっくりと顔を上げると、そこには心配そうな顔で私を見る女性の姿があつた。腰まである金髪の髪をたらしているその女性は、さつき見た私と同じ顔の人気が着ていた洋服に身を包んではいたが、顔は私とは違つていた。部屋を見回しても、私とコルと田の前の女性しかしない。

すなわち、今日の前にいるこの人がコルの言つていたフィーリアとということだ。

・・・さつきのは幻覚？

いろいろなことが一気にありすぎて、自分で思っているよりも疲れてしまつているのだろうか。

「あ・・・・大丈夫、です」

そり告げると、コルもフイーリアもほつとしたような表情になった。

「それでは、本題に入らせてもらいます。レーギス・・・いえ、優空さん。私たちにあなたの力を貸していただきたいのです」

フイーリアの言つていることはあまり意味が分からなかつた。私の力といわれても、私は運動神経は無いに等しいし、一般人なのだから不思議な力などあるはずもないし。

ただ、この人たちの言つことを聞かないと元の世界には帰れないといつこと、これから今以上に疲れるだるうことはわかつた。

「分かりました」

今の私にはこの返事以外は出来ない。

それに、ここまでてしまつた以上は私に出来ることならば協力してあげたいと思つた。

第十四話

私の返事を聞くと、フイーリアは薄く微笑み胸の前で指をパチンッと鳴らした。

すると、その場には3つの椅子が出てきた。

「話は長くなります。どうぞ座つてください」

「あ、はい」

私はその椅子に恐る恐る座つた。

実は椅子は幻覚で、座ろうとしたら尻餅をつくことになるのではないかと内心不安だったのだが割りと普通の椅子ですんなり腰を下ろすことが出来た。

「では、今からこの世界のことを簡単にお話します。少し長くなるかもしれませんが、よく聞いてください」

真剣なフイーリアの声に、私は静かに頷いた。

「ここ、クリュスタークスはたくさんの妖精とここに住む住人が共にして暮らす世界です。住人は妖精がいるからこそ成り立ち、妖精は精霊がいるからこそ成り立ちます。そして、自然を司る8体の精霊はこの世界を統治する者の存在によつて成り立ちます。統治するものとは、精霊と同じような自然の力を使える者のことです。つまり、私や貴女のこと。統治者が一人というのはこの世界で異例のことです

「す、ストップ！」

サラサラと流れるように話進めようとするフィーリアの言葉を遮つた。

フィーリアは小首を傾げて私を見つめた。

「説明が分かりにくかつたですか？」

「違つよっ」

私は顔の前でぶんぶんと両手を振りながらそれを否定した。

「とりあえず、立場が弱い順に住人、妖精、精霊、統治者ってのは分かつたけど・・・」

「いえ、立場が弱いではありません。力が弱く、その他の強い者の力に影響されやすいのです」

フィーリアは私が勝手に解釈したことを探りと否定した。ますますよく分からなかつたが、それはこの際どうでもよかつた。私が話を止めた理由はこの世界に暮らす人や妖精なんかの立場が聞きたかつたからではない。フィーリアの言つた話の内容をひとつ否定したかつたからだ。

「私、その・・・自然の力?とか、使えないよ?」

私がそういうと、フィーリアはそんなことかといつよいに小さく笑つた。

「貴女が使えないもの無理ないです。私も今は完全に操れとはいないのですから。精霊たちは今は眠つている状態です。それを起こさない限りは貴女は力を使えません」

少しだけ胡散臭いとは思つたが、私が口を挟めばそれだけ話がやや

うさんくわ

こしくなる事はわかつた。

私は簡単にフイーリアの言つたことに相槌を打つと、話を促した。

「話を戻しましょう。統治者がこの世界に一人になることは異例のことです。普通統治者は一人でなければいけません。それは統治者の力がほかのものたちと比べて強大になつてしまふからです。しかし、私たちは100年の間にこの世界を壊さず統治することが出来ていました」

「100年……も？」

私の年は16だし、目の前のフイーリアも私より少し上くらいにしか見えない。

「こここの世界は貴女といった世界と時間の進みが違うのです。ここでの100年は貴女の世界の数年と等しいです。私の見た目が貴女とさほど変わらないのは肉体が朽ちていく時間がほかの世界に比べゆっくりとしているからです」

私が思つていた疑問を見透かしているようにフイーリアは言った。
その後、少し深刻な顔になつて話を続けた。

「長い間統治できていたことで、油断してしまったのかもしれません。それから少したつてから異変が起こり始めました。住人や妖精が少しずつ消えていったのです。精霊たちにも異変が現れました。これではこの世界は壊れてしまうと言つて、貴女は私やコルがとめるのも聞かずに一人で偵察に行きました。しかし、それから何時間たつてもあなたは帰つてきませんでした。私の力で、貴女の場所を探しましたが結局は見つかりませんでした。私は諦めて一人でこの世界を統治していきました。しかし、それは無理に等しいことです。私たちは一人で生まれました。一人でいないとこの世界を統治する

ための力が上手く出せないのです。そのせいでこの世界は精霊も眠りにつき、妖精も住人も皆消えてしましました。その矢先、コルが地球と言つ世界に貴女を見つけたのです」

私はチラリとコルを見た。
コルは聞いているのか聞いていないのか目を閉じたままじっとしていた。

「後は想像できるでしょう。私はコルに言つて貴女を連れてきてもらいました。私の妹、レー・ギスの生まれ変わりである貴女を」

私はなんていって良いのか分からず、黙つてしまつた。

川の水が流れるような速さで話が進んでしまつたことも黙つてしまつ原因となつたが、聞きたいことが山ほどありすぎて何を言えば良いのか分からなかつた。

「私は、何をすれば良いの？」

やつとその質問を言つと、フィーリアはにこりと笑つて答えた。

「眠つてしまつた8体精霊を起こして欲しいのです
「それだけでいいんですか？」

いつたいどんな試練が待ち構えているのかと気構えしていた私は一気に脱力してしまつた。もっと危険なことだと思っていたのに、ただお寝坊な精霊を起こすだけなんて。

それなら力なんてたぶん必要としないし、すつゝく簡単なことじゃない。

しかし、ふと思つ。精靈を起こしてフイーリアが力を完璧に使えるようになつても、同じく力を使えるようになつた私が元の世界に帰つてしまつては結局また同じことの繰り返しなんじやないだろうか？

統治者の力が弱まり……また崩壊する？

「大丈夫さ」

考え込む私の横で、何故か眉根に皺を寄せた、多少イラついたようなコルがぼそりと呟いた。コルはコルで、何か考え方でもしていたのだろうか。

「え？」

「精靈が目覚めて力が戻つたら、俺がお前の力をフイーリア様に移す。そうすればお前がいなくても問題はない」

なんで、ここの人たちは私の考えがわかるのさ。
そんなにわかりやすい顔してるかな？

ちょっと目を逸らしがちに苦笑いしながら、コルの言つた『いなく
ても問題ない』という言葉が心の中で反響して寂しい音を奏でてい
た。

第十五話

言いたいことは全部言い終わったのか、フイーリア何か質問はありますか？ときいてきた。

質問したいことはたくさんある。

だが、いざ質問してと言われると何を質問したらいいのかわからぬい。

質問ついでわれてもなあ・・・。

んー・・・と、考えているとふとあれ？と思つことがあった。

住人はすべて消えたって言つてたし、統治者は私とフイーリアだけ。じゃあ・・・コルは何で消えないの？

「あの、コルって、何者？」

率直に聞く。

一番最初に浮かんだ疑問だし、こんな自分でも考えててもわかるわけないしね。

「コルは神官です。私の力が及ばなく、壊れそうになつたこの世界は歪が多いのです。それを塞いだり、その歪を移動に使つたり出来る人です」

だから私の世界に来れたり、ワープしたりも出来たんだ。
コルって意外とすごいんだなあ。

私が感心していると、フイーリアは突然思い出したように声を上げ

た。

「コルツ、ルブルムは食べさせましたか？」

慌てたようなフィーリアを落ち着かせるように「コルはゆっくりと笑つて言つた。

「（安心ぐださ）」。フィーリア様。事前に食べさせてあります

二人の間に流れる話の内容が私にはよく理解できない。

ルブルム・・・？？

ここには私たち3人しかいないし・・・私がそれを食べたつて言つてるの？？
はつきりいつて記憶にない。私は（）までほぼ強制されてつれてこられたわけだし、コルから何か食べさせられたわけじゃない。

「あの、ルブルムつて・・なに？」

私が遠慮がちにそう聞くと、一瞬落ち着きを取り戻していたフィーリアはコルを驚いたような焦つたような目で見つめた。

やつぱり食べさせてなかつたのですか！？

その日は確実にそういうのは、私でも感じられるのだから誰でも分かるだろう。

はあ・・・、とため息をついたコルが私を見て言つた。

「お前は（）に赤い実を食つただろう？」

「はあ？ 私そんなもの食べてないし。赤い実なんて

食べてなんかない。そう言おうとした私は心に何か引っかかりを感じた。

赤い実・・・赤い実・・・？

私の頭の中に、あの時の地獄が蘇る。

お母さんが用意した私の食事。

あの灰色の液体の中には、たしか赤い果肉のよつなものが浮かんでいた。

しかし、赤いものが浮いていたからといってそれがフイーリアのいうルブルムだとかいうものだとは限らない。お母さんのことだし、イチゴやらトマトやらなんかを適当にぶち込んだのだろうから。それに、いくらお母さんでも見覚えのないようなものを娘の食事に入れるなんてことはしないはず。・・・しないと思いたい。そもそも、冷蔵庫にどうやって入れたのかさえ説明が・・・。いや、コルなら可能なのだろうか？

グダグダと考へ込んでこる私に、コルは呆れたよう言い方でいった。

「毎に食事をしただるひへ、あの中に入つてたんだ」

「・・・・・・・・

やつぱりあの液体の中ですか・・・。

得体の知れないようなものを平氣で食事に混ぜるお母さんの私への愛情を疑いつつ、私はため息をついた。

「でもー。私食べてないよ？全部はいちやつたもん」

「別に飲み込まなくちゃいけないわけじゃない。ルブルムの周りの液体が口内に入ればいい話だ」

「なんで私の朝食に混ぜるのさ。今ここで食べてもいいじゃん」

「ルブルムの液体は異様な味がするんだ。まずいものはまずいものに入れたほうがいいだろ？」「…」

なんか、納得がいくようないかな」「…。

いや、いかないよね？

いつちやだめだよね？

「で？ルブルムとやらを食べなかつたらどうなるの？」

私が何気なく聞いたその質問に答えたのはフイーリアだった。

「貴女の世界と私たちの世界ではいろいろな部分で異なりがあるのです。空気中の物質もそのひとつ。ルブルムの液体には少量ですが魔力があります。そういう液体を取り入れなければ呼吸器官が麻痺して死」

「分かつたから」

ルブルムを食べなかつたらどんな結末になつたのかは分かつた。確かに、ああいう風にでも食べさせられてなかつたら私は今危険な状態だつたかもしれない。こんなところにつれてこられて、変な実を食べさせられそうになつたら絶対に拒絶していただろうから。そう思うと確かに怖い。だが、そんなことを一般人にさらりと言つてしまふフイーリアの方が私にはある意味怖いと感じてしまった。

第十六話

+++

「さて、こきなりこんな所につれてこられて貴女も疲れたでしょ。今はゆづくりと体を休めてください。この城には正常に使える部屋が私の寝室を抜いて1つしかないんです。後々準備させますから、今はその部屋を使ってください」

フィーリアのこの気遣いはありがたかった。

とりあえず、今私は疲れているんだ。本当にいろんな意味で。

「ありがとうございます」

私はペコッとフィーリアに頭を下げた。ゆづくりと頭を上げた先にあつたのは、コルが少し不満そうな顔でフィーリアと言葉を交わしている光景だった。

「・・・分かりました」

何を話していたのかは分からぬが、コルが深くため息をつきながら諦めの表情を見せているのだからそれほど嫌な話だったのだろう。

まあ、私には関係ない・・・と思つた。

不機嫌そうなコルはそれでもぎびきびとした足取りで私の隣まで來た。

「これからお前を部屋に案内するからついてこい」

そういうと、しまった扉の前でコルがまた何かを言った。
入ったときと同じように重々しいその扉は軋みながらゆっくりと開いた。

「行くぞ」

ほえー・・・と、改めて扉を見ていた私にコルは突き刺すように冷たく言った。

フィーリアとの話でイライラとしているからってそのイライラをこつちに向けないで欲しい。

そんなことを口に出せばか弱い私に何があるか分からないので今は言わないでおく。

無言で歩いていくコルの背中を見つめながらついていくと、コルが突然に立ち止まった。

「う、」

ただコルの後についていた私が、それに翻つてすぐ立ち止まる」となど出来るはずもない。私はコルの背中に思いつきつ鼻をぶつけてしまった。

「うう・・・止まるなら止まるつて言つてよお」

じんじんと痛む鼻を押さえながら、コルを睨む。

「言つて反応できるのか?」

「う・・・」

返す言葉もございません。

「で、なんで止まつたの」

「着いたから」

不満げな私の質問をさらりと答えると、コルは目の前の質素な扉を指差した。

先ほどまでフイーリアや私たちがいた部屋の扉とは天と地ほどの差・・・というといいすぎかもしれないが、かなりの差があった。この城の色と同じで白い色をしている扉だが、重々しい感じなどなく、一般家庭にあるような質素な扉だった。

ひとつ違つことがあるとすれば、その扉についている模様だろうか。扉の中央と、四隅に小さな丸い模様が描かれていた。

どこかで見た模様・・・。

「びー」で見たかを思い出さうとまじまじとその模様に見入つていて、頭の上から声が聞こえた。

「開けるからびー」

えらそうな声を聞いて、私はムツとしながらも扉の前からどいた。コルは扉に近づくと、コンコンと魔法陣のひとつを叩いた。

「・・・え。それで開いたの？」

「ああ」

さつきの重そうな扉を開けたように何か呪文でも唱つのかと思つて

いた私は拍子抜けしてしまった。

そんな視線に気づいたのか、コルは私を見て言った。

「あの扉は特別なんだ。あの部屋を守るために特殊な結界がはってあるんだから。」ひいの魔方陣が結界をつくって守ってくれる

ガチャ・・・

私は説明し終わったコルは扉を開けて中へと入つていった。私もそれに続いて中へと足を踏み入れる。

部屋の中は綺麗に片付いていた。
埃を被つているところなどこにもないし、ベッドやソファ。本棚やランプ。一般家庭にあるようなものがその部屋にはあった。不必要なものが何もないさっきまでの廊下とは違い、ここは誰かが使っている気配が感じられる部屋だった。

「なんか、ここって誰かが使つてるみたいな部屋だね

自分が言つて、はたと思つ。

ここに住んでいるのはフイーリアとコル。

フイーリアの寝室と、もうひとつしか使える部屋はないといつた。しかし、フイーリアとコルが一緒の部屋で寝泊りをしているとは思えない。

それに、部屋を出る前のフイーリアとコルの間で交わされた会話。
コルの諦めたような顔・・・。
私はコルの顔をそっと見た。

バチリと目が合い、視線が絡み合つ。

「・・・もしかして？」

「やつだよ。」
俺が使つてゐる部屋だ

ため息混じりにコルが言つた。

ため息つきたいのはこっちの方だよっ！…と言つてやりたいが、コル
だってこんなことになるのは嫌だったに違いない。

私と相部屋になるのがそんなに嫌なのかと思つて、なにか訳分から
ないもやもやが胸をいっぱいにするが気づかないふりをした。

+++

コルは私に部屋の内部の説明を始めた。

「これは触つたりやいけないとか、何々に必要なものせや置いてあるとかそんな説明だつた。

もちろん馬の耳に念仏で、私の頭の中にコルの説明は入つてくるはずもない。私の頭の中は、この部屋でコルと一緒に過じさなきやいけないといつて試練をどう乗り越えるかとこうことでいっぱいだったのだ。

「簡単な説明は以上で終わり。俺はフイーリア様に呼ばれているから行く。勝手な行動は慎めよ」

言いたいことを言ひと、すぐにコルは扉の向こうへと姿を消した。独りになつた部屋は、無駄に広いせいがどこか寂しく感じられた。私は立つているのもなんだと思い、部屋の中央に位置されている白いベッドに身をうづめた。

「はああ・・

ふかふかなベッドに寝転がつても疲れはとれそうになかった。それどころか、口から漏れるのは重苦しいため息ばかりだつた。

しかし、これからのことを考えると私にはため息しか出でこない。この世界が大変なのは分かつてゐるし、それを助けたいと思つてしまつたのは私だし、それは納得していることだし気持ちだつて変わつ

ていな。

だが、まさか体を休めるといつ部分でこんな試練が立ちはだかつて
いるとは思つていなかつた。

「まつたぐ。フィーリアは何考へてるのかなあ。コルは男なんだよ
ー・・・・」

一人部屋にしては十分な広さがあるこの部屋でも、相部屋の相手が
男で、しかもコルだと思つと妙に意識してしまつ。

年頃の女の子なのだからそれは仕方の無いことだ。うん。

「コルだつて今まで一人で使つてきた部屋なんだから、私と一緒に
と窮屈なんだうつなー」

そう何氣なく呟いて、気づく。

この部屋は今開放されたわけではなく、以前からコルが使つていた
のだ。

目を閉じると、コルの気が部屋を満たしているように感じる。

・・・このベッドでコルは寝てるんだよね。

ふと、そんなことが頭を掠める。それと同時に私は勢いよく上半身
を起こし、自分が寝転がつていた場所に目を落とした。
ピシッと敷かれていたシーツは、私が寝転がつたことにより無残に
もシワだらけになつてしまつている。

私は自分がつけたシーツのシワを左手でそっとなで、視線をベッド
の隅々まで這わせた。

「・・・・コルが・・・寝てたベッド」

口に出してそう呟くと、なぜだか顔がカアーッと熱くなつていいくのが分かつた。

何考えてるの？私っ！

ブンブンと頭を振つて、頭の隅に沸いてきた妄想を飛ばす。頭がぐらぐらと吐き気がするほど振つていると、ようやく沸いてきた妄想が飛ばされた。

しかし、そういう考えを持つてしまつた原因はこの部屋にあるのだ。この部屋にいる限り私のそれた妄想が完全に拭われることはないのかもしれない。

「・・・・ひよと出よ」

小さくため息をつき、火照つた頬を気にしながら、私はそつと部屋から抜け出した。

廊下に出ると、冷たい空気が私の体を包み込んだ。

「さて・・・・外に出るにはどうじう道順で行けばいいんだっけ・・・」

とにかく歩こう。

私は質素な純白の美しさを放つ廊下を歩き出した。

一步一歩足を動かすたびにカツカツという無機質な音があたりに響く。そんな寂しい音にまびれるようにして、人の声が聞こえた。

『 』
『 』
『 』

この声は・・・「ルと・・・フイーリア？」

私の足は誘われるようにしてその声がする方へと歩を進めた。

『ですが・・・
ね』

一人の声が少しづつ大きくなつてくる。
見ると、前方には「ルの部屋と同じような扉があつた。その扉はか
すかに開いていて、中からほんのりと優しい明かりが漏れている。
どうやらあの部屋に一人はいるらしい。
私は息を殺して、そつと扉に近づいた。

「フイーリア様はあの者が本当にレーギス様だと思われるんですね
？」

あの者。

「どうやら私のことを話しているらしい。」

「ええ。あの方で間違いはないはずです」

「あんな何も知らないような娘に何が出来るというんですか？」

焦りや不安を押し殺したようなコルの声が聞こえて来た。
気づかれないように、と願いながら、私は扉の陰から部屋の中を覗
いた。

真剣なコルの顔と、哀しげなフイーリアの顔がそこにあつた。

「心配は要りません。の方こそがレーギスの生まれ変わり
なのですから」

コルは何も言わず、フイーリアの方を見ていた。

私が覗き見してこることにはまだ気づいていないらしく。

『あんな何も知らないような娘に何が出来るというんですか？』

コルの言つた言葉が頭の中でこだましている。

確かに、私は何も知らない。助けたいと思つても、出来るかなんてわからない。

少しでも力になりたいと思つたのは、迷惑だったのかな？

胸の中がぐしゃぐしゃとして、気持ち悪い。

まだ部屋の中ではコルたちが話しているが、そんなもの聞く気分になれなかつた。

早くここから離れよう

「フイーリア様」

数歩部屋から離れた私の耳にコルの声が聞こえた。

先ほどまでの感情を押し殺したような声ではなかつた。

小さないい争いに似た会話はいつの間にか幕が閉じたらしい。

良かつたと思いながら少しずつ、部屋から離れた。

背中から、返事をする声が聞こえる。

「私用での一人きりです。フイーリアって呼んでくれないのですか？」

。

フイーリアのその言葉を聞いたとき、私は停止ボタンでも押されたかのようにその場で動けずにいた。

胸の中のぐぢやぐぢやした感覚が強くなり、理由もなく泣き出しそ

うになってしまった。

「ですが・・・」

「敬語もダメです。いつも通りに名前だけで呼んでください」

優しい「フィーリア」のその声が、突然卑しい者の声に聞こえた。
私の知らない一人の日常。

それは容易に想像できてしまった。

「ねえ。呼んでくれないのですか？」

・・・・・・・・・・・・

声にならない心の叫びをあげる。

こんな最低な考え方しか出来ない私が心底嫌になる。

二人がそういう関係だとしても、私にはまったく関係のないことなのに。

まず、いつやつて悩むことと自体が変なことなのに。

呼んで欲しくないと思つ自分がここにいた。

私は思わず耳をふさいでその場にうずくまってしまった。フィーリアの声も、コルの声も聞きたくなかった。

しかし、いくら耳をふさいでも、「ルの声は私の手をすり抜けて耳の中へと侵入する。

「・・・・・フィーリア」

右目から、ツーシンと一粒の涙がこぼれた。

第十八話

+++

「はあ・・・・・」

私は今、一人でコルの部屋の中にいた。二人の話を聞いた後、どうやつてここまで戻ってきたのかまったく覚えていないが、コルやフィーリアに責められていらない現状況から判断して二人に見つからずに戻れたのだと・・・と思う。

この部屋に戻ってきてから時間が経ったおかげか、いろんな感情でごちゃ混ぜになってしまっていた私の心も少しずつ落ち着きを取り戻していた。

ただ一つ心のもやになるものがあるとすればコルのことだ。随分時間が経つたのに、まだ戻ってきていない。

まだ一人で一緒にいるのかな。

そう考えると、落ち着きを取り戻していた心が、ざわざわと乱れはじめるようになる。

私は必死にそれを抑えて、大きく一度深呼吸をした。

別に私は、フィーリアは嫌いではない。むしろ、優しげな口調や笑顔には好感は持てた。友達にいたらいなつていうタイプで、もしも私が男ならば絶対に惚れていると思う。

そんな人を、あんな風に思つてしまふ自分が信じられなかつた。だけど、私がそういう印象をフィーリアに持つてしまつたのも紛れもない事実だつた。

私・・・どうしてあんなこと思つちゃったのかな。

自分という人間が、ひどく汚れていると感じたのはこれが生まれて初めてのことだった。

「ああ・・・」

こうこうふうに、心が落ち込んでいる時は誰かにそばにいて欲しいものだと初めて思った。

だが、ここには気を許せる親友も、家族もいない。

私は独りなのだ。

この心の落ち込みも、自己嫌悪も自分自身で解決しなくてはいけない。

『孤独』

いつもは何でもないと思つてしまつこの一文字が今はやけに私に重くのしかかつてくる。

人つてこんなにも浅はかで脆い生き物だつたんだ。

少しシリアスじみたことを思つてみると、どこか様にならない。

「・・・・・ふう」

少しバカバカしいことを考えていたら、数段気持ちが良くなつた。

人という生き物は単純で、どんな苦痛でも受ける側の心の持ちよつで地獄にも天国にも変わつてしまふのだと私は思つ。

独りという孤独がまだ胸に巢食つてはいるが、この際それは気にしないことにする。

今はうじうじ悩んだり、悲劇のヒロイン的お情なんて想像していても仕方がない。

心のもやの一番の解決策を探した方が賢明なのだと優空は思った。

解決策は案外早くに見つかった。

とても簡単なことだ。

「よし。忘れよ」

考えるのが面倒だったからこんな策になつたわけじゃない。
本気で考えてこんな策しかでなかつたのだ。

・・・まあ、面倒になつたというものあるけど。

手つ取り早く忘れるにはどうすればいいかなあ・・・・。

策を考えるのは簡単だったのに、今度は策の実行の仕方について頭を悩ませることになつてしまつた。

+++

「それにしても、本当のことを言わなくてよかつたのですか？」
「それはどういう意味ですか？」

突然神妙な顔でそう聞くコルに、フィーリアは厳しい顔でたずねた。
コルはフィーリアの放つ氣迫に押されそうになつたが、ぐつと我慢して前へと出た。

「あいつに・・・。フイーリア様がレー・ギス様だといつている奴に言った説明です。精霊たちは眠りについたわけではないし、それはフイーリア様の力が足りなかつたわけではないでしょう」

コルの言葉にフイーリアは耳を傾けるだけで何の反応も示さなかつた。

すべて本当のこととて、訂正など入れることは出来なかつたせいかもしない。

何も言わないフイーリアに、コルは少し強い口調で言つた。

「「ひ」いう細かいものでも、説明を怠れば危険があるのは知つてゐるはずでしょ？！まして今回は本当のことを言わなかつた。分かっていますか？命の危険だつて」

「黙りなさい」

コルの言葉は、フイーリアの言葉によつて遮られてしまつた。
いつにもない厳しく鋭い声に、コルは次の言葉を発することが出来ずになつた。

一拍の間をおいて、フイーリアは言つた。

「コル、部屋に戻つて休みなさい。もう疲れたでしょ？」

いたわりの言葉の中には、早くこの部屋から出て欲しいこと、いつが込められているのがコルにも分かつた。

「・・・」

何も言わずに、丁寧にお辞儀するとコルは静かにその部屋から出でいった。

コルがなくなった部屋で、フイーリアはコルに言われた言葉を思

い返していた。

本当のことを言わなくてよかつたのですか？

眠りについたわけではないし、それはフイーリア様の力が足りなかつたわけではないでしょ。

分かつていますか？命の危険だつて

「…………分かつていますよ。そんなことくらい。コル、貴方よりもよく分かつっています。貴方の知らないことも……」

呟く言葉はフイーリア以外の誰の耳にも入らなかつた。

第十九話

+++

「　　い、お」

遠くで聞き覚えのある声がした。

この声は誰だろ？「す」ぐ・・・安心する。

「　おこつ！」

ボーッとそんなことを思っていた私の耳元に、先ほどまでは比べ物にならない大きな声がこえた。ガバリと、反射的に体を上げると視界の中にぼんやりと人の姿が浮かび上がる。

「誰・・？」

「寝ぼけるのも大概にしろ」

コツン、と頭を小突かれた。

ぼんやりした視界でも分かる。この声はコルだ。

どうやら、実行方法を考えている間に眠つてしまつたらしい。

「あ・・・おかえり」

私はいたつて普通を装つて声をかける。

大丈夫。声は震えていない。

少しづつ視界がはつきりしてくると、コルの納得のいかないような

顔にぶつかる。

「どうかしたの？」

「別に」

相変わらずそつけない態度だった。
フィーリアには優しいんだろうな。

余計なことを考えてしまったと少し後悔した。

・・・ダメだ。

私はそう思った。「コルにこんな態度をとられると、なんだか胸が苦しくなってしまう。そして、ついフィーリアと比較してしまつ。こんなにも自分は弱かつたのだろうか。

「お前じゃどうかしたのか」

ふいに声をかけられて、心臓が飛び上がる。

「・・・別に」

同じよじ返すと、コルは私の横に寝転がつた。

「別ではないだろ」

「どうして」

ついつい言葉が鋭くなってしまつ。

少しの間をおいてから、コルは体を起こし私の皿を見ながら囁いた。

「元気がないから。ここにつれてきた時の威勢の良さはどこにいった

「・・別に」

私は意識的にコルから田を離し、行き場の定まりない視線の先を中で泳がせた。

コルは小さくため息をついた後

「言いたくないならそれでいい」

小さく言った。

私は長く息を吐きながら、背中からベッドへと倒れこんだ。

・・・・言えるわけないじゃん。

そんな私に留めて、コルも背中からベッドへと身を投じた。横を向くと、同じように横を向いていたこと田がある。

「・・・無理はあるなよ」

今までになじよくな小さな声が聞こえてきた。

私のことを・・・心配してくれてる？

ただ、単純に嬉しかった。

「うん」

小さくそういうと、横にしていた首を元に戻した。

すぐ近くに寝転がっているコルと田とあわせているのは、嬉しさ半分とても心臓に悪い。

「・・・あのや」

天井をあえげたままの状態で、私は口を開いた。

「ふい・・・フィーリアつて、優しいよね」

「・・・そうだな」

「やつぱり・・・優しい人つて、誰からも好かれるのかな?」

あまりにも突拍子ないことを口走ってしまったから、慌ててまだ寝ぼけているみたいと付け足した。

コルは付け足したことを聞いてんだか聞いてないんだか分からないうが、少し笑いを含んだよつな声で言つた。

「さあな。そういう感情は人それぞれだわ」

「・・・コルは?」

チラリと目だけをコルのほうへ向ける。コルは仰向けになり目を閉じていた。

「さあな」

さすがにそこまで話してはくれないか。
でも、幾分心が軽くなつた気はある。

私はコルの返答に何も返さず、ただ黙っていた。室内には私が呼吸をする音とコルが呼吸をする音しか音はない。

私はコルと一緒に相部屋の運命を受け入れ始めていた。どうせ、新しい部屋が準備できるまでの短い期間なのだから、少しでもコルと一緒にいられるならそれは嬉しいことではないかと考える方向を変えたのだ。

「・・・・あれ？」

間抜けな声を出しちゃった。

「何？」

静かに聞き返すコルに、何でもないことを口へり口へりコルが寝ている方と逆の方向を向いた。

ずっと、気になっていた疑問だった。
フィーリアがコルと親しげに話していただけでなぜあんなにも心が乱れてしまったのか。

コルの一言一言に一喜一憂してしまったのか。

それってつまり・・・。
私が、コルのことを好きってこと？

第一十話

優空は頭にわいてきた考えを拭い去つた。

ないないない、ありえない！「んないきなり訳分からんとこ連れてくるし酷いし冷たいやつを好きになるわけないし！」

心中で全力で否定するが、そんなことをするほど体は熱くなつてしまつ。

冷静になつていない証拠だ。

・・・コルはひどいやつだもん。私が好きになるはずないもん。でも・・・優しいところもあるんだよね。

先ほど私の体を心配してくれた気のことを思い出す。自分を上手く表現できないうだけで、本当は良いやつなのかもしけない。

「あ、そうだ」

一人で考え方をしてると、横から声がした。

「何？」

「お前今から寝るだろ？ もう遅いし」

「へーひん」

コルは私の目を見ながら片手でポンポンッとベッドを叩く。

それは・・一緒にベッドで寝よつとこうお誘いか―――？

好きだの何だの考えていた優空の頭は正確な判断ができていなかつた。

カアアアアツと顔が赤くなる優空を尻目に、コルは一言いった。

「これは俺のベッドだ

「は？」

突拍子もない言葉に私は間の抜けた声を発する。

コルの部屋に通されてしまったのだから、ここにあるものがすべてコルのものだとことぐらい分かる。

言っている意味が分からぬといふ顔をしている私を見て、コルはため息をついた。そして、私の後方を指差す。

頭にはてなマークが浮かんでいるままこの指差す方を見ると、そこにはソファがあつた。

・・・もしかして・・・？

「俺はここで寝る。お前はあそこで寝ろ」

「やつぱりっ」

思わず声に出してしまつた。

「分かつてたんなら早くソファに行け」

「そこはさあ、普通逆でしょ！私がベッド、コルがソファ！」

「何で俺の部屋で俺が我慢しなくちゃいけない」

「私は客も同然でしょ！」

「知らん」

言い争つてみると、コルは聞く耳持たずといった感じだった。

その後も言い争つたが、結局は私が折れてソファにいくことになつてしまつた。

コルは本当は良い奴。

それが数分前の私の考え方。

前言撤回

「ルはセーはりひとし奴なんだ」

+
+
+

「いつまで寝てるんだ」

んー・・・もう朝・・・?

「おひ起きる」

もう少しだけ・・・・ZZZ

一
お
い
！

そう叫びながら起き上ると、
ナルと目が合つた。

「お母さん？」

明らかに不機嫌そうな声で私に問いかける。

「寝ぼけました」

すぐに反省の意を見せると、コルは小さくため息をついて言った。

「ふん・・・もう朝だ。起きてしたくしない。食堂にフイーリア様が待ってる」

フイーリアに様をつけているコル。やはり、一人でいるときのみなのだろうか。
つて、ダメだめ。
考えない考えない。

「仕度つていっても・・誰かさんがいきなり連れてくるから何も持つてきてないです」

総悪態をつくとギロリと睨まれたが、私は正論を言っているんだから気にしない。

「そこに着替えがある。部屋出て待つてから早く着替えろ」

ソファの横にある小さなテーブルに確かに着替えがある。
手にとづてみると、滑らかな布地で触れている手が気持ちよかつた。

「分かった」

そういうのを確認すると、コルは部屋の外へと出た。
私は一人になった室内で服を脱ぎ、用意された服に着替える。

ワンピースタイプのその服を頭から被つて着ると、優空のために用意されたかのようにぴったりだった。

最後に腰の辺りを茶色に染まっているベルトで止め、準備完了。

「あ、そだ」

部屋の外で待つてゐるコルのところに行く前に壁にかけてある鏡で変なところはないか確かめた。
ぱっと見では変なところなんてない。

「よしひ

小さく気合を入れた。

部屋を出ると、しつかりコルは待つてくれていた。
しかし、私が出たのを確認するなり足早に歩き出す。

「ちょっと待つてよっ

私は慌ててコルの後を追い、食堂へと向かつた。

第一十一話

+++

食堂の扉もほかの扉と同じように、コルの書つ魔方陣のよつたもの
が書かれていた。
さすがに徹底している。

扉を開けると、中にはフイーリアと・・・・青髪の知らない男の人
がテーブルの向こう側に立っていた。
歳は私より2～3歳ほど上だらう。

「コル、優空おはよー」

至福の笑みで挨拶をするフイーリア。

その笑みに嫌な感じは一切なく、ただ好感をもてる綺麗な笑顔だつ
た。

フイーリアの横に立っている男の人は、私たちに気づくと深々とお
辞儀して笑いかけてくれた。

その笑顔はとても温かくて、心が少しどきどきと早くなつた。

あの人・・・誰なんだろう？フイーリアやコル以外にも入つていた
んだ・・・・。

その人を見つめながらそんなことを考えていると、頭に何かが当た
つた。

「・・・・!？」

すぐさま何が当たったのかを確かめると、コルの手だった。コルは痛む頭をさすりながら睨みつける私に冷ややかに言った。

「ボーッとしてんじやねえよ」

私の目の前にいたコルは、昨日の少し優しい感じのコルではなくここにつれてくる前の悪魔なコルだった。
何、朝から不機嫌なのかなあ。そんなにお母さんって呼んだの嫌だつたのかなー。

ブクーっと頬を膨らませたところで、フィーリアがクスクス笑いをしているのに気づいた。恥ずかしくなった私は、コルを睨むのをやめてフィーリアに視線を向けた。

視界の中にいるのはフィーリアと、隣の男の人。

「ねえ、コル。あの入つて誰?」

コソコソとコルに聞く。

「気になるのかよ?」

「気になつたから聞いてるの」

私がそういうと、「ルは短く

「知るか」

と呟くよつと言つて、ふいつと横を向いてしまつた。
先ほどよりも確実に不機嫌になつたことがよく分かる。

あああ・・・男子つてわかんないつ

少しイラだつた所で、フィーリアが私たちに席につくように促した。朝からイラライラとしてるのもどうかと思い、私はおとなしくそれに従う。

コルも不機嫌なのは相変わらずだが、おとなしく席に着く。

私たちが席についたのを確認すると、フィーリアはそばに立つている男の人を目配せした。

男の人はフィーリアに優しく笑いお辞儀すると、用意していた食事をテーブルに並べ始めた。

果物の乗った台の高い銀の皿。

パセリで飾り付けされているスープ。

焼きたてのパン。

その他もろもろ。

今まで生きてきた中で田にしたこともない食事だった。

「すゞい・・・」

思わず感嘆の声を漏らしてしまつ。

「光栄です」

ふふっと、男の人は笑つた。

優しい笑顔・・・誰かさんとは大違いだあ・・・。

「セル、準備ありがとう」

食事を並べ終わった男の人に、フィーリアが声をかけた。

セルと呼ばれた男の人は、はいと笑つて返事を返した。

「それでは僕はこれで」

最初と同じように深々とお辞儀をすると、男の人の周りに風が吹いた。

男の人は風の中に消えるように見えなくなり、後に残った風はフィーリアの胸のあたりに吸い込まれていった。

「・・・・・」

何・・・今・・・。

人が目の前で消えた・・・!?

あまりのことに、フィーリアを直視したままでいるとフィーリアはクスクスと笑つた。

「驚きました?」

「まあ・・・だって、人が・・・」

「ふふ」

楽しそうに笑うフィーリア。

どこか馬鹿にきている気がするのは・・・私の被害妄想かな?

「馬鹿になんてしてませんよ」

笑いながらフィーリアは言つ。

本当に何で人の思つてることがわか・・・

「顔に書いてありますか?」

今すぐ鏡で自分の顔で確認したい。

「もう・・・さつきの・・・セル・・・さん?って、何者なんですか?」

フィーリアは一瞬だけ視線をコルに向け、再度私に戻した。

「セルは、今は私の・・・よく言えば分身。悪く言えば使いのようなもので。必要なときに呼び出して、用のないときは私の体へ戻

「そして」

フィーリアは続ける。

一瞬ためらうようだがまたハルのほうを見る。

いた。

「コルの実の兄でもあります」

へえ・・・ パルのお兄さん・・・。
つて・・・

「ええええええ！」？

第一十一話

私は信じられないという風にフイーリアとコルを交互に見た。コルはわからないが、見る限りフイーリアは嘘をついているようこそ思えない。

「で……でも……」

セルという人がコルの兄だとは私には思えなかつた。

だつて……コルとセルさんが兄弟なのなら……なんで……

考え込む優空を見て、フイーリアは優しく言った。

「優空。貴女の疑問に思つてゐる点はわかります。コルと兄弟であるセルが、どうして私の分身となつてゐるのか、でしょう?」

フイーリアの目はどこか悲しそうだつた。

そんなフイーリアに申し訳なさそうに言ひ。

「あ……いや。コルとセルさんが兄弟ならなんで弟のコルは意地悪鬼畜かなと」

「……」

唖然としているフイーリアの顔。予想が外れたことに驚いているらしい。

確かに、普通ならそこに注目知るのかもしれないが、生憎私にはそこに気づくほど頭の回転はしていなかつた。

「あはは…」

フィーリアの表情に、なんと言つて良いやうと笑つていまかせつとすると、すぐ隣から視線を感じることに気づいた。
もちろん隣にいるのは誰なのか分かる。
殺氣立つて睨んでいる理由もよく分かる。

・・・・地雷踏んだかな。

私は少し僅かに反省し、決してコルのほうを見ないようとした。

「ふふ。仲が良いんですね」
「・・・・・どっちがですか？」

言つてからしまつたと思った。

私はなんてことを言つたのだろう。

慌てて上目遣いにフィーリアの顔色を伺う。フィーリアは何か閃いたような顔をして少しこやけながら私を見ていた。

「とりあえず、食事を食べましょーか。せっかくセルが用意したのに冷めてしまします」

フィーリアが食事を食べ始めたのを合図に、私も用意された食事を口に運んだ。

食事を食べ終わると、ゼンからともなくセルが姿を現した。

+++

何も言わずに食器の類を片付け始める。

「……フイーリア様。俺は先に部屋に戻ります」

コルが立ち上がり、食堂を出て行く。

「あ・・・」

私もコルの後を追おうと立ち上がった。
まだこの建物の道が分からぬのだから、置いていかれたら絶対に
部屋にたどり着けなくなってしまう。
しかし、追うことはできなかつた。フイーリアに呼び止められたからだ。

「すみません。優空にせ、話しておきたいことがあるんです」

今から部屋を出れば、コルに追いつくことはできるかも知れない。
だが、コルに追いつくこと以上に、フイーリアの話しておきたい事が
気になつた私はここに留まることを選んだ。

「話しておきたいことは一つあるのです」

「はい」

「一今は、セルのこと」

私は再度椅子に腰を下ろしてフイーリアと向き合つた。
セルは食器を片付け終わつたらしく、すでに姿を消していた。

「一今は、セルのこと」

予想していた通りだと私は思った。

フイーリアがさつき言つていた、「もとセルの違ひのことだ」という

「」ともなんとなく予想ができる。

じゃあ、もつひとつて？

「もつひとつせ、昨日の夜の」とドヤ。

。

昨日の夜といつ言葉に反応した優空の顔をフィーリアは見逃さなかつた。

「やはり、聞いていたんですね？」

「・・・」

昨日の夜。

コルとフィーリアの親しげな会話。

名前で呼び合つ中。

意味不明な嫉妬。

いろんなことを思い出しすぎて、私はまた息苦しくなるのを感じた。

「また気分を害してしまったらいめんなさい。でも、どうして話しておきたいんです。誤解を解くためにも」「

誤解・・・？

何を言つているのか良く理解できない優空に、フィーリアは安心させるように小さく微笑みかけた。

「とつあえず、セルのことから話しましょうか

第一二三話

そう静かに言うフイーリアの田はやはりどこか悲しげだった。

何かがある。

直感的に私はそう思った。

「優空、昨日説明しましたがこの世界には統治者である私たちの力が欠けてしまい、危険な状態であることは説明しましたね？」

「はい」

昨日の魔方陣が描かれている部屋で話されたことを思い返す。たしか、油断をしたら精霊が眠ってしまったとか何とかだったと思う。

「それが・・・セルさんと関係あるんですか？」

私のもつ小さい脳で考へても、頭の中でセルさんとのことは結びつかなかつた。

「セルが、私の分身として私の中にいるのはその精霊が寝てしまつたことが原因なんです」

悲しそうな顔で、でも力強い口調でいつフイーリア。私は口を挟まずにフイーリアの話を聞くことにした。

「セルは、コルと同じように神官の力を持つっていました。神官としての実力ではコルの力には及びませんでしたが、セルはコルと

は違ひ精靈の力を外から吸収して一時その力を最大まで上げること
が可能でした。簡単に言つなら、セルは精靈の力があつたからこそ
神官としての役割をもてたのです。私が言つていることが何を意味
するのかわかりますか？」

なんとなくだけど、分かる気がしていた。

口で説明しろなんていわれたら説明するのは不可能に近いけれど、
心の中でこんな感じなのだとというイメージはあった。

ただ、それが正解なのかは分からぬ。

私は、分かるかという問い合わせに対して肯定することも否定することも
せずにフィーリアの瞳の奥をじっと見つめた。
そのことの意図が分かったのか、フィーリアは少しだけ口元を緩め
た。

「あなたのそのイメージはきっと的を射ていると思います」

それから緩めた口元をキュッと引き締めた。

「セルは、精靈が眠つていいくにつれて神官の力を失つていきました。
神官の力が失われてしまえば、他の人たちと同じです。セルは消え
るしかありませんでした」

フィーリアの口調は力強い口調から徐々に弱々しくなつていぐ。
冷静に喋ろうとしているらしいが、声もかすかに震えている。

フィーリアは・・・セルさんのこと・・・？

そんな考えが頭をよぎった。

しかし、昨日の夜のコルとの会話がある。私はその考えを取り扱った。

「しかし、幸いにもセルにはもともとの神官の力がありました。微弱なものでしたが、そのおかげで消えてしまつことはありませんでした。しかし・・・」

「姿を維持することはできなかつた・・・？」

私の言葉に、フィーリアは静かに頷いた。

「力が微弱すぎたのです。精霊の力で補つていたこともあってもともとの力が衰えてしまつてゐるのです。セルは消えなくともそのまま弱っていく危険がありました。ですから私の中に取り込んだのです」

フィーリアは言葉を切り、自分の胸の辺りを優しくなでた。
それから強いまなざしで私を見つめた。

「私は、この世界を取り戻したい。そして・・・セルを取り戻したい。優空にとつてはこれから危険なことがあるかもしね。それでも・・・」

必死に、そして静かにフィーリアは懇願していた。
先ほど取り払つた考えがまた頭を掠める。

「フィーリアは・・・セルさんが好きなんですか？」

考えるだけに留めておこうと思つた考えは口から抜け出しフィーリアへと届いた。

フィーリアは私に今まで見た中で一番優しくて壊れてしまいそうな

笑顔を向けて言った。

「私が生涯愛するのは、セルだけです」

私に向けられるフィーリアの力強いまなざしは嘘をついてはいなかつた。

本当にフィーリアはセルのことが好きなのだと、優空は確信した。

でも・・・それじゃあ、昨日のコルとフィーリアの会話は・・・？

私は納得できなかつた。

じやあ、昨日の夜のことは何だつたの？

私の思考を支配するのは醜い疑い。僅かな嫉妬心。

「昨日のこととは誤解です」

フィーリアが静かに言つた。やはり私は顔に出でてしまう性格らしい。

「誤解つて・・・どうこうことですか？」

高ぶりそうな気持ちを抑えながら、フィーリアと同じよつに静かにきいた。

はい。フィーリアはそう小さく頷いた。

「優空は、私があのときのおねだりをコルと話していくと想つたのですよね？」

「だって、そうじゃないですか？あの部屋にはフィーリアとコルしかいませんでした」

部屋を覗いたとき、確かに二人以外の人影なんてなかつた。だから、
フィーリアはコルと話していないとおかしい。

「貴女はコルと話しているときからあそこにいたのですね。コルの失言に気を悪くしないでくださいね。でも、そのときから貴女がいたなら、やはりコルと間違えたのも納得がいきます」

「間違えたって・・・確かに、私は・・・」

「ええ。優空が私の部屋を見たときは確かにコルと一人でした。ですが、その後は違います。ほんの少しの間でしたが、コルは退室をしていました」

そんなのは変だ。コルじゃなかつたとするなら、誰かが部屋の中へ入らないといけない。

でも部屋への入り口には私が立っていた。
ほかにあの部屋への入り口があるわけでなければ誰も入ることがで
きるはず。

「あ・・・」

いた。一人だけ、それが可能な人が。

第一十四話

フイーリアを見ると、もうわかつたでしょ？…とでも言つよつに私を見つめていた。

あの時、ドアなんて使わずに入れた人。
私には一人しか思い浮かばなかつた。

「セルさん…ですか？」

不安げにそう聞いた私に、フイーリアは静かにいうなずいた。

でも・・・。

フイーリアの言つていることは信じたかつた。

昨日の妙な嫉妬のせいで、ただでさえ自己嫌悪に陥りそうなのに、
これ以上人を信じられなくなるのは嫌だつた。

それでも、私はフイーリアが本当にセルと話していたのかを疑つてしまふ。

嘘をついているんじゃないかな。

そんな気持ちが心を支配して、純粋な考えを出来なくさせていく。

・・・だつて。

私は耳の奥に残る、フイーリアを呼ぶ声を思い出した。
少し小さく、恥ずかしそうにフイーリアを呼ぶ声。

それは「ルの声だった。

「・・・まだ、納得が出来ていなじょうですね」

小さくため息をしながらフィーリアは言った。

そのため息は、私に呆れているものではなくて、どちらかといつと
フィーリアが自分自身に向けてついたものだった。

「だつて・・・あれは、コルの声・・・でした」

フィーリアの目の奥をじっと覗き込むようにして確信を持った目で
いつ優空に、フィーリアは少しだけ、ほんのりと笑った。

「これは・・・聞いたほうが早いのかもしれませんね
「・・・？」

フィーリアの言いたいことが分からぬ。

聞いたほうが言い?何を?

セルさんの声のことを言つてているのかな・・・?
でも、さつを聞いたし・・・。

『光栄です』

そう言つたセルの声を私は頭の中で再生する。

コルの声に似てなくもないけど・・・。コルよりセルさんのほうが
大人びている声だし。

疑いがある眼差しで、フィーリアを見つめていると突然後ろから声
をかけられた。

「おい」

振り向かなくても誰だかわかる。
この偉そうな言い方は、コルだ。
迎えに来てくれたのだろうか?

「口」

慌てて後ろを振り向いた私は、言葉を失った。
振り向いた先にいたのは、コルではない。

そんなはずないよ。だって・・・今の声は・・・コルの・・・。

しかし、目の前にいる人物が先ほどの声がコルのものでないことを示している。

私は、からからに渴いたのどで小さくその人の名を呼んだ。

「・・・セルさん」

でも・・・絶対に、今の声は・・・つ

信じられなかつた。

だが、目の前にいるのは確かにセルで、どうにもコルがいる様子はない。

「わかりましたか？私が言つた誤解の意味を」

フィーリアが私の背中に向けて言葉を投げる。

セルに向けていた視線をフィーリアに戻し、どういうことなのかと目で問う。

そんな私に、フィーリアはふふっと微笑んだ。

「人という生き物が何かを聞くときは、耳だけで聞いているわけではないんです」

「え？」

耳で聞いてないならどこで聞いているところのだろう?

意味がわからないというふうに小首を傾げる私。フィーリアはすぐ
に私の後ろにいたセルに声をかける。

セルは静かにフィーリアの元まで歩いてきた。

「こちらにいるのはセルですね?」

「え・・・はい」

当たり前のことを聞いてくるフィーリアの意図がわからない。
そんな私をよそに、フィーリアはセルに何か伝えた。すると、セル
は私の目を見ると深くお辞儀をした。

「先ほどは無礼な声かけ失礼いたしました」

コルの声ではない。

『光栄です』

そう言ったセルの声だった。

私はチラリと後ろを向く。

もちろんコルはいない。さつき私に声をかけたのは間違いなくセル。
なのに、私はコルだと思った。あの声は、コルだったはずなのに。
再度この場で聞くと、全然違う。

「わかりますか?人は耳だけで声を聞くわけではないのですよ

フィーリアが静かに言った。

「耳だけではなく、目や頭の中でも声を聞いているのです。貴女は、

先ほどのセルの呼びかけをコルだと勘違いしました。それは、頭の中でセルが大人びた人、もしくは乱暴な物言いをしない人だと思っているからです」

確かに、そうだ。

セルはコルとは違つて、大人びて見える。

優しい言葉遣いや、柔らかな物腰。

子供のように、時々乱暴な言い方をする「コルとは結びつかない」と思つていた。

「そして、今は田の前にいるのがセルだと認識した上で声を聞きました。コルの声には聞こえないでしょ?」

「・・・・・」

私の無言は、肯定としてフイーリアに届いた。

第一十五話

「田と頭で聞くといつのはそういうことです。田と頭でその人の声を聞いたときと、声のみを聞いたときでは感じ方が違うのです」「じゃあ・・・」

私は一瞬言葉を切った。

それから、フィーリアを真っ直ぐに見つめた。

「私の勘違いだつたと?」

絶対にフィーリアから田を離さないよつにその田を見つめた。
嘘を言つたらすぐにわかるように」。

しかし、フィーリアもまた私から田をそりさず領いた。嘘を言つているよつには思えない。

勘違いで嫉妬してたなんて・・・

恥ずかしさを通り過ぎて、自分自身に呆れてしまつ。

「・・・・・・」めんね

フィーリアから視線をはずし、ややひつむきながら謝つた。
勝手な誤解で、フィーリアを心の中でなじつてしまつたこと。疑つてしまつたこと。

とにかく謝らなくてはいけないとつた。

私の謝罪に、フィーリアは一瞬驚いた。そしてすぐに、クスクスと笑つた。

「大丈夫ですよ。優空は本当にコルが好きなんですね
「えつ！？」

素つ頼狂な声をあげながら顔を上げると、丁度セルがフイーリアの中に消えていくところだった。

「ああ」

セルが完全に消えると、フイーリアは優しい声で私に声をかけてきた。

「今日からは早速精霊の元へといつてもらいます。場所などは道中コルから聞いてください」

言いながら、フイーリアは私に隣まで歩いてくる。

「とりあえず、部屋まで戻りましょう」

私の返事を待たずに歩き出したフイーリア。
しかし、その歩調はとてもゆっくりで、私が追いつくのを待つてくれているようだった。

一瞬の間をおいて、すぐにフイーリアの隣へとき方を並べて歩きだす。

「ツツ」という足音が響くだけで、二人の間に会話はない。だが、それが今はなぜか妙に心地よかつた。

少しすると、目の前には見覚えのある扉が見えてきた。
コルの部屋の扉だ。

「ここまでくればもう部屋までいけますね」「うん。ありがとう」

お礼を言つと、フイーリアは小さく笑つてもと来た道を戻つていった。

私は、そのうしろ姿を数秒見つめたあと、コルの部屋へと近づいた。

「た・・・だいま～・・・？」

扉をゆっくりと開けて中を確認した。
コルはベッドに横になつてゐる。

「おかえり」

私が部屋の中に入ると、コルはベッドから起き上がつた。そして、ソファーに無造作に置かれた2つのバッグを手に持つと、片方を私に向けて放り投げた。

「わ・・わ」

ポスツ

なんとか床に落とすことなくキャッチすることが出来た。
バッグの中を確認すると、丸くてかたい板のようなものが入つているだけだった。

「何これ？」

私はその板を取り出しながら聞いた。

その板は8つの窪みがあつて、何かをはめることができるようにな

つていた。

真ん中にせやせうと書かれて、魔方陣が書いてある。

「精盤。精靈の力が宿るものだ」

「「」の蓬みは？？」

「・・・精靈が起きたらおのずとわかる」

コルはそつけなくそれだけ言つて、近くにあつた細いゴムで肩まである髪を束ねた。

「何？」

ジッヒコルを見ていると、明らかに不機嫌な声でコルが聞いてきた。

「な、んでもないつ」

慌てて「」まかして、話題を変えた。

「あのや、フイーリアが精靈のところへ行って行つてたけど、どこに行くの？」

「やうだな・・・」

コルは一瞬考え込むじぐれを取つて、ゆづくつ言つた。

「最初はウエントウス・・・風の精靈のところに行つて野の

そういうコルの顔は、少しだけ険しかった。

自分の荷物を肩にかけたコルは、私のいる扉まで歩いてきて、静かに言った。

「お前が思つてゐるほど、精靈と会つのは簡単なことぢやない」

私は、コルの目を見た。

真剣な目。

精靈を起こしに行くのは、それほど大変なことなのだとわかつた。

「わかんないけど、頑張るよ」

私の返答にコルは優しく笑つた。

・・・・普段意地悪なくせに・・・こんな顔見ると・・・。

胸がキュッとしてしまつ。

『優空は本当にコルが好きなんですね』

フイーリアの言つた言葉を思い出す。

違つよ。私は・・・別に・・・。

顔を赤く染めながらコルの顔を見つめる。

コル本人は、私の今の気持ちなんて氣づく様子もなく、扉を開けて部屋の外へ出ようとした。

出る直前に、コルは私に今までにないほど静かに小さく呟くように言つた。

「絶対に、死ぬなよ」

。

それほど、大変なのだろうか。
死という言葉が付きまとつほど？

「うん」

ゴルの言葉に、私も小さく頷いた。

第一十六話

城に入った入り口まで行くと、そばにフィーリアが立っているのが見えた。

「準備は終わったのですか？」

いつもと変わらない口調で私たちに話しかけてきた。

「はい。これからウントウスのところへ行こうと思います
「わかりました。気をつけてください」

それからフィーリアはコルに近づいて、何かを呟いた。それにコルも小さく頷く。

何言つたのかな。

内緒話をされたと言う疎外感が小さく私の胸に生まれた。
それを見透かすかのようにフィーリアはこちらを向いて先ほどコルにしたように私に近づいてきた。

「コルが無茶をしないように気をつけてください。・・・きっと、
精霊を・・・起こすのは簡単なことではありません。細心の注意を
払っていいってください」
「わかりました」

「コルにもこりういう注意を言ったのかな？」
ホッとした安心と、本当にそうだろうかと言つ疑問が半分半分だつた。

「あと」

フイーリアは付け足したよつて言つた。

「ほんことでやきもち焼いてちゃダメですよ
……なつ」

私の反応を見て満足そうに笑つと、フイーリアはギュッと抱きついてきた。

体からかすかに香る石鹼の香りが心地よかつた。

「絶対に、帰つてきてください。もう一度と……」

最後まで言葉を続けなかつたフイーリア。

しかし、その口調からその先に続く言葉は容易に想像できる。

「つと。絶対に帰つてくれるよ」

私もフイーリアを優しく抱きしめて、約束を交わした。

お城からでた私は、コルの背中を追つよつにして歩き出した。
コルはずつと前ばかりを見てこつちを見ようとしてくれない。

「ねえ、コル。ウエントウスでビンごてるの?..」

周りは殺風景で、最初の景色とまつたく同じ。草木もなければ空も
曇つている。お城からだいぶ歩いたことによつ、次第に心配になつ
てくる。

だが、「ルは私の問いには答えず逆に質問をしてきた。

「お前、フィーリア様になんていわれたんだ?」

人の質問に答えるよつよ・・。

怒り半分呆れ半分。

ため息をつきながらフィーリアに言われたことを口にした。

「精霊を起すのは簡単じゃないから細心の注意を払ってだつて。
あと

「こんな」とでもちやダメですよ。
て、そんなこと言えるわけないし。

「それだけ」

無理やりに終わらせると、ルは歩きながら聞いてくる。

「あとに続く言葉は?」

周りは殺風景なものから、高い柱が沢山立つてるとぐくと変わった。

どの柱もヒビが入つていて、途中で割れたりしていただがなかなか凝つた感じの柱だった。

ちらほらと、木らしきものもある。だが葉っぱは全て落ちて、はげていた。

「えー?」

私は聞こえない風ふうを装つて周りを見ながら聞き返した。
しかし、こんなもので誤魔化せるわけもない。

「だから、あとに続く言葉。お前何か良いかけただろ?」

「いーじゃん!それよりコルだって何か言われてたよね?なんて言
われたの?」

「別に何も

「ずるい!私は言ったのにーー!」

ブーリングをする優空に、コルは何も言わなかつた。

『何があつても、優空を守つてください。死なせるようなこ
とはしてはいけませんよ』

コルの頭のなかにはフィーリアの言葉が響いていた。
いつになく真剣なフィーリアの声が、事の重大さをしんしんとコル
に伝えていた。

「コル?」

いきなりコルの顔が怖いくらいに真剣なものになつたから、私は心
配して声をかけた。

私の呼びかけにコルは返事をしてくれない。

無視していると言つよりは、考え方をしていて聞こえていないと言
う感じだ。

「ねえ、コ・・・・・つう

コルをもう一度呼ばうとしたとき、右頬に鋭い痛みが走つた。

そして、しづくが頬を伝つ冷たいような温かいような感触がする。

私がそつと右頬に手を当てるのと、私の異変にコルが振り向くのは同時だつた。

「…………お前……その傷……！」

右頬に当てた手が、ぬるりとした液体を捉えた。私は震える手で、それを見た。

それは真っ赤な血だつた。

右頬からはまだ温かい血が流れ続け、服を赤く汚していた。

・・・いつの間に？

コルも私も周りを見た。

周りには柱があるだけで、肌を切るような刃物なんてどこにもない。それでも周りを見回す私の視界に、他のつぶれかけた柱とは違う何かを見つけた。

私の身長より一回り大きい柱の上にどこかで見たことのある黒く汚れた丸い玉がのつていた。

お城の魔方陣が描かれた部屋にあつた奴と同じものだつた。

「コル。あれって……」

私が言つと、周りを注意深く見ていたコルは顔を上げた。

「目的地に到着。また傷を負う前に走るぞ」

「う・・・うんっ」

いきなり走り出したコルに置いていかれないように私も駆け出した。体中に冷たい風が当たる。

それと同時に、私の体中に小さな痛みが走つた。

第一十七話

ちくちくする痛みを感じながら、足の速いコルにおいていかれないように必死に走る。そのせいで途中から左側のわき腹が内部から殴られているかのような痛みが私を襲つた。

でも、私は足を止めることはしなかつた。

ただひたすらに目の前にある目的の場所である黒い玉の乗つた柱を目指して、何かから逃れようとしているかのように足を動かし続けた。

やつとのことで柱のところまでつくと、私は痛むわき腹を押さえながら荒くなつた呼吸を整えるのに神経を集中させた。

辺りは風の吹くヒューヒューという乾いた音と、私たちの呼吸の湿つた音だけほかには何も聞こえない。

顔を上げて周りを見ても、目に付くのは目の前にある大きな柱とさつきまで走つてきた道にある白い壊れた柱とその残骸。あとはハゲて栄養がすべて吸い取られた木のミイラがまばらにあるだけ。危険そうなところは見受けられなかつた。

安心して肺の中から深く息を吐き出す際にふとわき腹を押さえている自分の腕に目をやつた優空は小さく息を呑んだ。

なに・・・これ。

視線の先にある自らの腕には、先ほどまでは無かつた無数の小さな切り傷ができる。体の方を見ると、足の部分には腕と同じよう

に傷があり、服はとけたままになってしまっている。

「 大丈夫か？」

となりで多少荒れた息を整えてながらコルが聞いてきた。

「ん・・・。なんとか。でも・・・」

傷のことを言おうとコルを見ると、コルも同じようになにいち服が裂けてしまっていて露出した部分からは真っ赤な血が滴っている。しかし、当の本人は自分の傷を気にする様子も無ければ驚く様子もない。私の新しくできた傷を見て先ほどのように反応することも無かつた。

・・・・・！

その反応を見て、私は小さく聞いた。

「どうして傷ができたのか知ってるんだよね？」

その問いに、コルは答えようとしなかった。

一瞬、風のせいで聞き取れなかつたとかという考えが頭をよぎつたが、コルの視線が空中を泳ぐところを自分でも驚くほど五感が鋭くなつていた私は見逃さなかつた。

「どうして傷ができたのか、コルは知ってるんでしょ？」

今までに無いほど静かに、そして強くコルに詰め寄つた。

ここまで体に傷つけられて何も教えられないのはあまりにも酷い。それに、何かを隠されたままではこれからもつとコルに何かしらの

負担をかけてしまつ。

『コルが無茶しないよつて氣をつけて』

フィーリアの声がどこからか頭に響く。

コルはきっと、自分のために無茶はしない・・と黙り。無茶させる原因があるとすればそれは私。

だからこそ、隠し事はされたくなかった。

睨むような鋭い目でコルを見ていると、コルは何かに気づいたようにびくりとからだを動かした。

そして私を見ると、仕方ないな・・・とでもこいつのように静かに言つた。

「俺も確信があるわけじゃない。こんなことは初めてだからな」

危険は無いはずなのに、神経をあたりに滑らせながらこるが前置きをした。

前置きはいいから早くいってよ。

そう思つたが口には出さない。

「これはたぶん・・・風だ」「風?」

静かに詰つコルに、私も少しだけ声の音量を小さくしながら聞き返した。

風つて・・・今吹いてるこの風のことだよね・・・。

こんな風がどう傷と関係するのかわつぱりわからない。

「風が」の傷とどう関係あるわけ?」の傷、風じゃできなことよ?普通・・

悪態をつくみつけた。コルは、今更?とでもこいつみつけため息をつきながらいった。

「普通の風ならな

コルがその言葉を言い終わるか終わらないかのうちに私の体はいきなり目の前にある柱に叩きつけられた。

「・・・・・」

突然の出来事に抵抗することができるのはずも無い。

顔面直撃は免れたものの、直に柱にぶつかった体の左側が今まで味わったことが無いほどに痛い。そのあまりの痛みに前触れもなく涙がこぼれた。

「おひつ!大丈夫か!?

すぐにコルが屈んで、壊れやすい何かを触るようにそっと服の上から左の肩に触れた。そして、チッと軽く舌打ちすると、左肩辺りにできた服の裂け目に手をかけて力任せに破いた。

「ちよつ・・!」

なにすんの!

抵抗しようとしたが、動かすと腕が痛い。

そんな私にかまうはずも無く、コルは左側の方から腕にかけて何かを確かめるように触った。

「・・・折れでは無いな」

安心したようにコルがいった。

・・・・あ・・・それを確認するためだつたんだ。

考えればコルがこんな状況で下心ありで何かをするはずも無い。気が動転してしまっていたとはいえ、抵抗しようとしたことをほんの少し反省した。

コルは立ち上がると、柱から背を向けて私たちが通ってきた無人の道をキツと睨みつけた。

「こらんだろ？出て来いよ

第一一十八話

「コルの冷静で、怒りの含まれたその声は何もない空間に小さく反響して消えていった。

誰に向かつて言つてるの……？

コルがにらみつけている道には人影などない。ましてや、生き物のいる気配すらない。

私には何がなんだかわからなかつた。

「隠れても無駄だ。出て来いよ」

シンとした空間に向かつて、コルはまじつ一度言つた。

先ほどよりも大きな声で、強く。

すると、突然道の真ん中に小さな竜巻ができた。その竜巻はゆっくりと宙に浮き、立つて いる「コルの田線」と同じ高さでぴたりと止まつた。

「何……あれ……」

私はコルの背中に向かつて疑問を投げかける。

コルはこつちを振り返らず、私が竜巻を見る邪魔をするかのように田の前に立ちふさがつた。

「お出ましみたいだな」

「え？」

何がなんだかわからない。

お出まし？誰が？

てか、竜巻が何なのかも答えてくれないし。

私はもう一度竜巻を見よつと、腕を動かさないよつて「コロボ」にして道を覗いた。

浮かんでいた竜巻は、私が見たのとほぼ同時に発光して、シャボン玉が割れてしまつよつてあつといつ間に消え去つた。

「　え」

咄嗟のことに何て言えぱいいのかわからない。

竜巻が消え去つた後に残つたのは小さな少女だつた。

2頭身の小さな体に、薄黄緑のウエーブがかかつた腰まである長い髪。そして、真っ黒に沈んだ光の無い黒い瞳。
どこのでもいるよつな・・・とは言えないが、普通の女の子に見えた。

だが、普通でないことばよくわかる。

フィーリアの話ではこここの住民はみんな消えたといつていたし、何よつその子は竜巻が消えた場所・・・空中に浮かんでいたのだから。

「誰・・・？」

「・・・」

聞いてみても、少女は暗い瞳で私たちを見つめるだけで何も答えない。

その問いかに少女の変わりに答えたのは、目の前で見る邪魔をするコルだつた。

「あれは風の精霊・・・ウエントウス。この傷を作る風を操る本体

だ

「あれが・・・」

風の精霊・・・。

想像していたものよりずっと人に近い形をしていた。パツチリと開いた黒い目なんて日本人形を思わせる。精霊ではなく、こここの住人といつても納得してしまいそうなほど人の子供のようだ。

・・・・・って・・・

「えええ！？ 精霊！？」

「ああ」

「精霊って、封印されて寝てるんでしょ？ 起きてんじゃん！…」

どうなってるの？

そんな視線を送った直後、コルが怒ってるような声を出して私に言った。

「俺の後ろに隠れて絶対に動くな！…」
「へ？」

間抜けな私の声を合図にしたかのように、いち早く行動したのは少女・・・ウェントウスだった。ウェントウスは両手を大きく広げ天に向けると、何かをつぶやき始めた。

ウェントウスの声はあまりにも小さく、辺りは風の音以外不気味なほどに静かなになんていいているのかは聞き取れなかつた。

しかし、何かの呪文であることは想像できる。

ウエントウスが呪文を唱え始めたのを見たコルは、右手を天に掲げて左手を滑らかに動かしながら同じように呪文を唱え始めた。

コルが呪文を唱え始めたちょうどそのとき、ウエントウスは空に向けていた両手を大きく勢いをつけて振り下ろした。その瞬間、少女の方向からものすごい勢いで鋭い風が私たちに牙を向けた。

私たちに向かってくるあの風が普通でないことくらいわかる。・・・さつきまで体に当たつてこの傷を作っていた風なんかとは比べ物にならないくらい強い」とも。

・・・あれにあたつたら、こんな擦り傷なんかじやすまない。

心が焦る一方で、頭の中は驚くほど冷静で、あの風に当たればぜひつななるのかをたやすく想像できた。
だからといって、どうにかなるものではない。

風から逃げることなんて、不可能に近いことなのだから。

「・・・」

その現実を受け止めたくなくて、ただ迫つてくる風が怖くて、私は田をつぶることしかできなかつた。

ベュウカウとこう鋭い風の音はすぐ近くまで迫つてこむ。

・・・
いや

痛いほどビ、田をつぶる。

「 ポークルム・ウイトレウム」

うるさい風の音の中に混れるマルの声はやけに鮮明に私の耳に届いた。

その声が聞こえて一瞬の間をおいた後、ダーンッといつ何かがぶつかるような鈍い音があたりに響いた。

第二十九話

・・・・・。

鈍い音を最後に、いきなり風が当たる感じがしなくなつたことをいぶかしみ、私はゆっくりと目を開けた。まず、体を確認する。

よかつた・・・傷は増えでないみたい。

私はほつと息をついて、今起こつたことを理解するために顔を上げた。

すぐ田の前にはコルがいる。

もちろんコルの前方にはウエントウスが。

ただひとつ違うことがあるとするならば コルの田の前に現れた壁だ。

いつの間にか現れたその壁が、私たちに向かつてくるはずだつた風を遮つてくれていた。

「コル・・・この壁・・・」

「・・・今の俺では全詠唱をしても簡単なバリアを張ることしかできない。しかも、その場しのぎの程度だ」

相変わらずウエントウスから田を放さないよつにしながらコルが言った。

確かにこの壁は風の強い威力に押されて震えている。破られるのも時間の問題だろう。

「私に、何かできることはある?」

「・・・

私の問いにコルは答えなかつた。
できることとは無い。せいぜい足手まといにならぬようじっとしてゐつてこと?

無言の否定。

でも、何もできることが無いといわれるのは予想がついてた。私は何の力も無いから。

「・・・・」

小さくコルの口から声がもれるのが聞こえたかと思うと、私たちとウェントウスを隔てていた壁は消え去り、威力の弱くなつた風がコルを襲う。

「つあ・・・・」

コルの腕から真つ赤な血が流れ落ち、地面をぬらした。

壁がなくなつたところへ、チャンスだといわんばかりにウェントウスは攻撃を仕掛けてきた。コルは瞬時にそれに対応して壁を作るが、今度はあっけなく破られてしまった。

コルを襲つた風が、消え去りきれない勢いを私にぶつけた。
頬と腕に氷が張つたような冷たさと、続いて焼かれるような熱さが襲う。

もちろんこれだけではウェントウスの攻撃は終わらなかつた。

一度風を戻したウェントウスは壁を作り出したコルのように右手を上に上げて何かを唱え始めた。小さなその手のひらに小さな白い塊ができたかと思うと、その塊はまっすぐにこちらに向かつて飛んで

きた。

塊は「コルの頭に躊躇いも無く飛んでいく。

「つ・・・・・ポーカルム・ウイトレウムッ」

コルは反射的に今使うことができる力で頭一点に集中してバリアを作った。一点に集中して作れば、より強力なバリアにすることができる。もちろんバリアの無いところにあたれば致命傷をあうことは確実だが、この塊はまっすぐに飛んでくることが見て取れたからコルは集中させる方を選んだ。

コルの予想通り、その塊はまっすぐにコルの頭のほうへと飛んできていた。

途中までは。

コルがさらに頭へのバリアへ神経を集中させようとしたとき、その塊はほんの少し軌道をそれ・・・・コルの頭を通り越してしまった。塊が狙っていたのは、最初から私だったのだ。

どりじょり・・・・つ

絶体絶命。私に何をしろとこいつの、この状況で。

コルは塊が私を狙っていることに気づいて対処をしようとしてくれたが、すでに遅い。

塊は私の目の前。

私がそれを避けられるはずもない。

・・・・・ダメだあつ

私は突然の恐怖に、その塊から目をそむけることができず、自身に

迫つてくるその塊を見つめた。田前に迫つてきている塊が私の前髪へ触れた。

「 プラキドウム」

ピシイツという鋭く高い音を出して、その塊は止まつた。私の顔との距離は2cmあるかないか。

塊が触れた前髪の一部が摩擦で切れて服の上に散らばつていた。

・・・・何が、あつたの。今。

呆然と、止まつてゐる塊を凝視する。

その塊は突然小刻みに揺れだしたかと思つと、キャッチボールで投げられるボールみたいに緩やかな弧を描いてウェントウスの方へ戻つていき、ウェントウスの足元の地面ではじけた。

「お前・・・」

驚いたように目を見開きながら、コルは声を漏らした。

「今・・・何をしたんだ・・?」

何をしたか?

その問いに、私が答えられるわけがない。
何もしないのだから。

「私何もしてないよ・・!コルがやつたんじゃないの?」
「今のウェントウスの攻撃から身を守つたのはお前だよ」

コルは首を横に振つた。

そして、俺の力はあるタイミングで発動しても間に合わなかつたらな、と付け足すようにいつた。

・・・今のは本当に私がしたの?
・・・・・・・・・わかるない。でも・・・。

私はゆっくつ立ち上がつた。

ズキ・・・

立ち上がるときに動かした左腕が痛んだ。けど、折れていないのでからそれほど問題ではない・・・と思つ。

立ち上がつた私は、ゆっくつとコルの隣に並んだ。

「・・・つ、俺の後ろに隠れてろー」

コルはちりつといひひて皿をやつながら怒鳴つた。

その怒鳴り声を無視して、私はもう一歩だけ前に出た。
コルの言葉を無視したかつたわけじやない。頭で何かを考える前に、
体が自然に動いてしまつたのだ。いつすることが当たり前かのよう
に自然に。

不思議と私も、体が勝手に動いていくことに疑問は抱かなかつた。

なんだか・・・・・の感じ・・・・・。

体の奥が熱くなるような、そんな感じ。

私は口を閉じて、体の奥にある熱をもつと強く感じ取つとした。

「・・・・・おい!」

ふいにコルが私の右肩をつかんだ。

「危ない！下がれッ」

目を開けると、ウェントウスがまた静かに呪文を唱え始めていた。
私はコルの言葉を意識的に無視した。

なおもうるさく下がれというコルに、私は言った。

「大丈夫だよ」

確信はまったくなかつた。
でも・・・大丈夫な気がした。

「・・・勝算はあるのか?」

厳しい口調で「コルは言った。

「ないよ」

私は私でいつもどおりの口調で答えた。
こんな返答をしたら「コルは怒るんじゃないかなーって思つてたけど、
それ以上はうるさく言つとしなかつた。ただ、任せる。と小さく
言つただけ。

きっと私の平然とした態度を見て、何かあると思つたんだと思つ。
あながち間違つてないかもしないけど・・・正解ともいえない。
私は何をすればいいのか、本当に何もわからんなんだもん。
ただ、今を信じるしか私にはできない。

「へんなぞ」

その声に、私はウェントウスを見た。

呪文の詠唱は終わったのか、じつと私を見つめている。
だが、まだ攻撃の機をうかがつてているようで攻撃はしてこなかつた。

「コル

「なんだ?」

小さく「コルを呼ぶと、コルはすぐに返事をした。

「バリアって、私にかけることできる?」

「ああ」

「コルは少しだけ声のトーンを落とした。
私が何をするのか見当がついたのかもしれない。

いや・・・。むすがに見当はついてないかな。私が行動に出るのだろう可能性をいろいろ考えてただけかもしない。
だって、私だって自分がどう行動するかわからぬ。
保険のためにかけておいてほしかつただけ。

「私にかけてくれないかな?」

「・・・」

「コルの返答はなくて、ただ無言。

「無理ならいいよ。私だって、自分がどう行動するかわからぬ。
その保険でかけてほしかつただけだから」

「え・・・」

咳くように口から漏れたその声は、自分がどう行動するかわからぬいといふことに対する疑問や驚きを含んでいたように感じた。

どういう意味だ?

「こんな感じで。

「わかった・・・」

ふいに、コルが答えた。

続いて、私の体はあたたかい何かに包まれた。あのガラスのようなバリアだった。あたたかいと感じたのは、冷たい空気が当たらなくなつたかららしい。

「無茶はしないでくれよ」

その声はどこか苦しくて、私も胸が苦しくなるのを感じた。

「うん」

私が返事をした3秒後に、ウェントウスは攻撃を仕掛けってきた。それと同時に、私は走り出していた。
逃げたわけじゃない。向かっていった。ウェントウスに向かって、まっすぐ。

「・・・・・?」

「ルの驚いたような声が聞こえた気がした。

無茶はしないつていつた3秒後に、無茶な行動に出たんだからそんな反応するのも無理ないのかもしねり。

ダアアン…

「・・・・・?」

風がバリアに当たつた衝撃が私を襲つた。

一瞬体制を崩しそうになつたが、何とか転ぶことはしなかつた。

だが、その衝撃でバリアは壊れてしまった。私の肌には冷たい空気が当たるようになり、小さな切り傷ができるいく。

それでも私は走り、すぐにウェントウスの目の前まで行つた。
もともと、それほど距離が離れていたわけじゃないけど、私に向かって吹いてくる風のせいで長い距離を走つたように足に疲労感があった。

「・・・・・」

ウェントウスは私が目の前に立つても何の反応も見せなかつた。その態度は反応するという感情が抜け落ちたような・・・まるで人形だった。

また大きな攻撃をされたら、生身の私は敵わない。

「ウェントウス・・・」

私は小さく彼女の名前を呼んだ。
呼んだというか、彼女の名前が自然と口から漏れたというほうが正しいかな。

名前を呼ばれたウェントウスは、やはり反応を見せなかつた。それでも、一瞬だけピクリと体が震えた気がした。

そんなウェントウスの小さな体に、私はそつと触れた。
とたんに私の口からは言葉が紡がれていく。

「汝の囚われし自然の力」

知らない呪文。
だけど、知っている呪文。

「我の前へ解き放て・・・リーベル」

言い終わると、私が触れていたウホントウスの体から黒い煙のようなものが姿を見せた。

私はすぐにウホントウスの体から手を離すと、煙を凝視した。その黒い煙は、蛇のように一瞬うねつたかと思うとあつとこづまに空高くに浮かび、一瞬のうちに消え去ってしまった。

あの煙・・・なんだったんだる・・・？

ひとつつの疑問を胸の中で考えていると、後ろからひたちに向かって走つてくる気配がした。その気配は私の隣で止まった。

もひるん、気配の主はコルだ。

「お前・・・」

コルは言葉が見つからないよう、黙ってしまった。
重たい沈黙の中には、私とコル。そして力なく両手をぶら下げて浮いているウホントウスだけ。

何か話そうとしたけど、私も何をいつていいのかわからない。

冷静になって、私がいった言葉を考えるとわからないことが多すぎた。

囚われし力?

解き放つ?

力が足りなくて、眠つてしまつただけのはずでしょ??

胸がそんな疑問でいっぱいぐちやぐちやで口から話しかける
氣力がなかつた。だから沈黙。

「・・・ん

そんな沈黙を破ったのは、私ではない。しかし、コルでもなかつた。残るのは・・・

「あ・・れ・・・?」

声の主はウェントウスだった。

状況の飲み込めていないような田で私とコルを交互に見ている。

「コルと・・・・・・・?」

私たちを行ったりきたりしていた視線は、私に向かられて止まった。

「レー・・・・ギス・・・・様?」

「あ。えっと・・私は・・」

いきなり話しあしたウェントウスにしどりもどりになりながら訂正を入れようとするとい、訂正するよりも早くウェントウスが私に抱きついてきた。

「レー・ギス様!生きていらしたのですねーー!」

お母さんにすがりつく子供のように小さな体をいっぱいに広げている。

こんなふうにされると、別人だといつのが躊躇われてしまつた。

「ウエントウス」

そんな私を見たコルが、やつと声を出した。

私が訂正できなかつたことを彼女に伝えるために。

「そいつはレー・ギス様じゃない。レー・ギス様は・・・死んだ」

第三十一話

「死んだ……？」

沈黙が襲つ前に、口を開いたのはやはりウェントウスだった。信じられないといつて、口調で、ウェントウスは私を見つめた。

「私……違うの」

いきなり子供のように無邪気になつたウェントウスを傷つけないよう言葉を選ぼうと思つたけど、口をついたこの言葉は結果ウェントウスを傷つけてしまつた。

「でも……どこからどう見ても……レー・ギス様では……！」

ウェントウスは首を振りながら、事実を受け入れようとはしなかつた。

その目には、涙が浮かんでいた。

コルは、それでも嘘をつくことなく事実を話した。

「ウェントウス……レー・ギス様は確かに死んだ」

確実に傷つけてしまう内容。

レー・ギスとウェントウスがどれほどの仲だつたのか、私にはわからんないけど……。ウェントウスの反応を見る限りでは、少なくともウェントウスはレー・ギスを慕つていたことがわかる。

コルはその内容を、オブラーートに包むようなことはせずに、ただその事実のみを伝えた。

でも、コルはいじわるとかそんなので言つてるんじゃない。

だつて、すゞしそうな声だつたから。

「…………のま、優空。レーギス様の生まれ変わり」

「優空・・?」

確認するよりこ、ウエントウスは私を見た。

「うん。私は・・優空」

「優空・・・・・」

落ち込んだ色を隠せないウエントウスに、なんて声をかけてあげたらいいのか私にはわからなかつた。

励ましの言葉なんて、本当に落ち込んだ人の前では紙のように薄いもの。

だからつて謝つたら、逆にもつと落ち込ませてしまつかもしれない。弱い私には、ウエントウスかコルが話し出すのを待つことしかできなかつた。

「優空様・・・・」

唐突に、ウエントウスが私を呼んだ。

様をつけられると、なにかくすぐつたい様な感じがしてしまつ。

「優空でいいよ。何?」

「『めんなさい・・・・』

何がごめんなさい?

何で私が謝られるの?

私の頭に浮かぶクエッショングマーク。

「・・攻撃の」と・・わかつても、止められなかつた

悲しそうにウントウスは言つた。

「めんなさい、と言つたのはさつきまでの攻撃に対してのものらしい。

考えると妙だ。

今のウントウスはさつきまで私たちに攻撃していたウントウスとは明らかに雰囲気が違はずぎてゐる。

「大丈夫だよ。でも、どうして攻撃なんて・・それに、止められなかつたって・・・そもそも、精靈は眠つてゐんぢやないの？」

優しく頭をなでながらさう質問すると、ウントウスは驚いたように口を見開き、ひどく困ったような顔をしてコルを見た。

「その話はまた後にしよう。とりあえず、フィーリア様に報告に城に戻らなくちゃな

私の質問を後回しにされたことはびよつと軽くムカツとするけど、いつまでもこんなところはいたくないし。帰るのが優先かな。お城に戻つたら無理にでも聞き出せばいいし。

「はーい」

コルの言葉に、私は小さく返事を返した。

「あ・・・優空様、待つてください」

帰る発言をした私たち、慌てたようなじぐれをして、ウントウスが口を開いた。

「これを」

そういうと、ウントウスは自分の胸に両手をぎゅっと数秒当てた。
そして、ゆっくりと前へ差し出す。

差し出されたその小さな手の中には大きなビー玉サイズのエメラルドグリーンのガラス玉のようなものが握られていた。

「これ何??」

受けとりながら聞く。

エメラルドグリーンの玉は澄んでいて、綺麗な色をしていた。太陽にかざせば光るかなと思つて空に向けたが、どこを向いても空は灰色。太陽はなかつた。

「それは私の力を凝縮したものです」

「んー。で、これをどうすればいいのかな?」

太陽のない空を恨めしげに見つめていた私は、空から目を離しながら聞いた。

ウントウスが質問の答えを口にする前に、コルがバカにしたように口をはさむ。

「お前精盤もつてんだろ?」

「あー」

私はかばんから精盤と呼ばれたを取り出した。

ウントウスからもらつた玉をそつと近づけると、磁石のN極とS極が引き合つよつに、その玉は勝手にひとつずつ窪みくとその身を納めた。

直後、強い風が私たちの近くに吹いた。でも、体に傷がつくことはない。心地のいい風だった。

その風はウェントウスがい、
中を押すように吹いていた。

腰までの髪が風と戯れる

そんな自分の髪を片手でゅつくりと梳きながら私は振り返った。

新編　日本書紀傳 卷之三

玉の乗つていたあの柱。

でも、明かりに違う箇所があつた。

「あの玉つて、黒かつたよね？なんで・・・」

柱に乗つていた濁つた黒い玉は、精盤に納められている玉と同じよう
にエメラルドグリーンに変わり、優しい色を奏でていた。

「あれが、あの柱の本来の姿なんだよ」

コルが言った。

その口調は遠い昔を懐かしむような、それでいて悔しそうな熱のこもったもつたものだった。
氣のせいかもしないけど。

「でも何でいきなりかわったの?」

れひやまで黒いもののばすだつたのこ・・・。

「精盤に玉をはめただろ?」

「うそ」

手の中にある精盤に皿を落とす。

8つあつた満みのひとつにはウヨントゥスにもらつた玉が納まつてい

「その精盤は簡単に言えばこの世界の力の源なんだ。はめた玉と同じ能力を共有するものが反応してくるんだよ」

「へえ・・・」

分かつた氣がある。うん。たぶん・・・。そういうことにしておこう。

「よつするに、ここに玉をはめたから同じ能力を共有してゐるやこの柱が反応したってこと? ??

「簡単に言えばな」

コルは一呼吸ついたあと、何かに気づいたのか険しい顔をしてあたりを見回した。

あたりは何も変わっていない。

柱の玉の色が変わったこと意外は・・・だけど。

「おかしいな

「何が?」

私も同じように見回してみたが、おかしなところなんて見当たらない。

まあ、私がどんだけ注意深く見ても何に注意してみればいいのかわからんないんだから気づくはずも無いわけだけど。

「ウエントウスは気づいているか?」

「はい。ここは私の聖地ですし・・・」

躊躇いがちに小さくウエントウスは言った。

私だけが気がついてないのか・・・。

微妙に少しくやしい。

・・・て、ん?聖地つて??

「聖地つて言つのは精靈個々で『えられてこむ村のべき聖なる土地だ

「なつ・・・・!」

ため息混じりに説明を始めるコルに、私は驚きで声を上げてしまった。

声に出してた！？

私は意味無いと分かっていても、反射的に両手で自分の口をふさぐ。

「お前の考えることなんてバカでも分かる」

コルは鼻で軽く笑いながら失礼なことを言つてきた。

「あー。じゃあ、コルはバカなんだね！」

私も負けじと言い返す。

今の言い争いの勝負は引き分け。先制点を取るべくもう一度口を開けかけたとき、横からくすくすと小さな笑い声が聞こえた。

ウェントウスだ。

そうだ。ここには私たち以外にも人はいた。人・・ていうか、精霊だけど。

とにかく第三者がいたことを忘れていた。

今のやり取りを見られていたと思うと、いきなり恥ずかしくなり顔が染まつた。

その様子を見て、またウェントウスが笑つた。

・・・わざ今までの落胆は無くなつたわけだし、よしとじよつ・・。

「そろそろ本当に城に帰るぞ。フィーリア様に報告をしなければいけない」

コルはふう・・と息をついて歩き出した。

ため息をつきたこのままひちだつて。よく分かんない世界で頑張つてんのに……。

てか、質問またスルーかよ！

「うう・・・おかしことこひらひらー。」

「あとで話す」

ひらひらをチラリとも見ずに歩こうとコル。

絶対に嘘だつ！

そう思つたけど、けんかしても仕方ないし、結局最後に負けるのは田に見えるわけで……。

「行ひつか」

私はウントウスに手を差し伸べた。
差し出した手に小さな手が触れる。
あたたかいそれを私はゆっくりと握り締めた。
空中に体を浮かべるウントウスを引っ張るようにしてコルの元まで走つた。

「ねー。コル。これつてまた歩くの？」

「他にどうやって帰る？」

「最初にお城に行つたときみたいにワープみたいのを……」

「危険すぎる」

融通の利かないやつめ……！

あの時は嫌がる私を肩に担いで無理やりやつたくせに……。

「ふーっと頬を膨らませると、最初に言葉を交わした時のよつな口調でウエントウスが言つ。」

「優空様! よければ私がお送りしましようか?」

「え・・・できるの?」

「はいっ」

言つが早いが、ウエントウスは両手を上に差し伸べ小さく呪文を唱えた。

すると、やわらかい風があたりに吹いた。

と。

「ひゃああつ」

「! ?」

風が吹いたかと思うと、私とコルの体は空中に浮かび上がった。最初は驚いていたコルだが、慣れているのかすぐに冷静を取り戻し空中で体を安定させた。

一方私は・・・

「やーだああつ」

どこに重力をおけば安定するのかまったく分からず、不安定に体を浮かせている。

「これどうすればいいの?」

安定してない恐怖に半泣きになりながら誰とも無く助けを求める。

すぐにウエントウスがっこりと笑った。

「大丈夫です！安定して無くとも落ちるなんてことはありませんか
ら」

「そういう意味じゃな・・・」

「お城に向かいますよ」

「いやああつ」

+++

それから数分もしないうちに私たちはお城へ戻ることが出来た。確かに、ウントウスが送つてくれたことは助かつてゐる。うん。だつてまた同じ長い道のり歩くなんて嫌だつたし。
だけど・・でもれ・・。

「・・・気持ち悪い」

私はこみ上げてくる吐き気を、ぐつと我慢した。
数分と言えど、あんな不安定な状態で空中にいたら誰でも具合が悪くなるに決まつてゐる。
まだ吐かずに我慢できている自分をほめたいくらいだ。

「そんなところにしゃがんでないで報告に行くぞ」

頃垂れてこぬ私を見ながら「ハルはわいせと歩き出してしまつ。待つと言つ」と知らないのかまつたく。

てか、あの余裕な感じが今はむかつくな

私は自分に力を入れて、ゆっくりと立ち上がる。おなかの中がぐるぐるしてくるような感じがして實に気持ち悪い。

「大丈夫ですか・・?」

隣では、ウントウスが心配そうに眉を寄せていかりを見ている。

原因を作ったのは・・・。

「だいじょーぶ」

君でしょ、という言葉を飲み込み笑顔を見せた。
ウントウスはその顔を見て口元がほころばせた。
それから私たちは、先を歩いて城に入ろうとしているコルに追いついて一緒にフィーリアのところに向かった。

+++

「おかえりなわー」

最初にフィーリアと対面したあの部屋に入ると、すぐにフィーリアが満面の笑顔で出迎えてくれた。

「ただいま」

私もそういうて笑った。

コルは何も言わずにフィーリアに笑いかけただけ。絶対に私には向けてくれない笑顔に、小さく嫉妬したけど、私の心はもうあのときのように乱れてしまうことは無かつた。

「フィーリア様。久しぶりです」

ウントウスはペコリとお辞儀をした。

「おかえりなさい。ウントウス」

笑いながらウントウスの小さな頭を優しくなでている。
ウントウスも嬉しそうにしていた。

「フイーリア様……」

そんな中、和みムードを壊すよつた低いテンションの声音でコルが
切り出した。

「俺たちは、精霊と接触しました。こいつは、もう隠し事なんて無
理です」

そう言い、チラリといちいち見たコルはフイーリアに向かい、全て
を話したほうがいいのではないかですか?と付け足した。

コルが言っているのは、たぶんウントウス・・つまり精霊のこと。
力が足りなくて眠つてゐるはずの精霊がどうして起きてゐるのか。私だ
けが知らない真実……。

「……そうですね」

「ふう・・・と、観念したようにため息をついた。
そして、小さく謝つた。

「優空・・『めんなさいね。嘘をつきたかったんじゃないの……。
ただ、貴女が……」

一瞬言葉に詰まつたように、フイーリアは口を結んだ。
そして、一瞬の間をおいたあと口を開く。

「・・・貴女が、怖がるんじゃないかと思つて」

フィーリアは頼りない笑みを浮かべながらそういった。
だけど、私には理由がそれだけとは思えなかつた。最初に言おうとした言葉をとつさに変えたのだと。そう思えてならなかつた。
それに怖がらせないためだとして、危険を教えてくれなければ最悪の場合死んでいたかもしれない。

でも、それはフィーリア自身がよく分かつているのだと思つた。
自身の無いその表情がそう物語ついていた。

その様子に、コルは気づいているのかと横目でうかがつ。しかし、コルは平然としていて不審に思つてゐるのか思つていなかつた。

「とにかく、精霊たちのこと話をしますね」

話を切り出すフイーリアの顔はさつきまでのどこか頬りない表情などではなく、一切の質問を許さないとでも言つような厳しい顔だった。

その雰囲気に私は口を開くことが出来なかつた。

それに・・・私の思い過ごしかもしないし・・・。

今朝、フイーリアと向かい合ひして会話を想い出す。一方的な勘違いでフイーリアを困らせてしまつた。あんなことはもうしたくない。

「手短に話しますね」

やんわりとした口調で、厳しい顔のままでフイーリア話し出した。

「昨日、優空には精霊眠りに落ちてしまつたと説明しましたね」「うん」

「もう身をもつて体験したでしようが、精霊は眠つてゐるわけではありません。力がマイナスに働き、力に操られてしまつているのです」「と・・こうと?・?」

理解しようとはしている。

私の頭が追いついてくれないだけで……。

「 フィーリアは小さくため息を漏らした。

・・・なんかごめんなさい。

「 手短に話したかったのですが。仕方ありません。少々長くなりますがよろしいですか？」

「 はい」

一呼吸おいてから、フィーリアは再び話し始めた。

「 まず・・・優空。いえ、レー・ギスがいなくなる以前のことです。二人の統治者では力が強大になり、この世界が危険になると思われていました。しかし、その考えとは裏腹に私とレー・ギスは一人でちょうど良いバランスをとれていたのです」

「 でも、それは100年の間のこと・・だつたんだよね？」

昨日の話を思い出す。

確かにフィーリアは、100年は統治できていた、しかしそれから異変があき始めたといつていた。

「 はい。ですがそれは統治者の力のバランスが変わったからではありません。・・・自然の力を持つもの・・・。その誰かが、力をマイナスに使つたのです」

「 力を・・・マイナスに？」

「 はい。どんな力にも、プラスとマイナスがあります。力をプラス

に使えばそれは光になり、マイナスに使えばそれは闇になります

力は使い方によって、毒にも薬にもなるつていうこと……だよね。

だから、この世界は決められた一部しか自然の力を使えないんだ。

以前はいたらしい住人や妖精も同じように使えたが、誰かが悪用してしまう恐怕がある……から。

でも、それなら……

「誰が、力をマイナスに使ったの？」

「フィーリアの言つことを疑う気はない。

隠し事があるような感じはするけど、いつか話してくれるつて信じてるし。

だけど、それなら誰かが故意に力をマイナスに使つたつてことになる。しかも、力を使えるのは限られた人のみ。

「フィーリアと、コル、セルさん、精霊たち。それから……^{わた}レーギス。

その中の誰かがこの世界を壊そうとしている。

・・・・・信じられない。

私は小さく頭を振った。

本当は信じられないのではなく、信じたくないのだ。

フィーリアたちはもとより、これから会うであろう精霊たちの中にそんな考えを持つものがいるなんて……信じたくない。

「それが……」

私の問いに、フィーリアは顔を曇らせながら口を開いた。

そして、ちらりと一瞬だけウェントウスの方を見て静かに言った。

「だれがやつたのか・・・わからないんです。それが、個人なのか、団体なのかも・・・」

フィーリアは申し訳なさそうにすいません、と小さく謝った。

・・・わからない・・・のかあ。

誰がやつたのかわからないのならば仕方がない。

ほんの少しだけ、誰がやつたのか知りたいとは思つたが、フィーリアの口からその誰かの名前が出なかつたことに私は安心していた。

「それで・・・どうなつたの?」

重たい沈黙が訪れる前に、私はゆっくりとその先の話を促した。

第三十五話

沈黙にならずに話を再開できたことに少しおほつとしたようだ、顔の緊張をほんの一瞬だけ緩ませて、フィーリアは話し始めた。

「……マイナスに使われた力によつて、まず、この世界に歪ひずみが生じました。大きなものではなくて、無数な小さな歪です。私とレギスが統治者としての力をもつてしても、その歪は消えるどころか、増える一方でした。神官であるセルやコルが歪の対応に行つたのですが、それでも歪はあちこちに残りました」

そういえば……コルとセルさんは神官だったんだっけ。

私は昨日のフィーリアの話で神官についての話を思い出す。

歪を塞いだり、その歪を移動に使つたり出来る人。だっけ……
・?

簡単にまとめるとなんな感じのはずだ。

まあ、歪を移動に使うのは本人のやる氣しだいみたいだけど

「暫くして、歪は増えなくなりました。しかし、今度は精霊に異変がおこりました」

「精霊に……」

無意識のうちに私は横目でウェントウスの様子を伺っていた。

ウェントウスは自らの小さな肩を同じくらいに小さな手で抱きしめ、目を閉じてフィーリアの話を聞いていた。

「はい。私たち統治者と契約を交わしている精霊たちが、契約を破棄したのです」

「契約？」

あまり聞きなれない言葉だつた。

契約つて・・・・約束事を頭よそに言いかえた感じのものだよね。契約書とか聞いたことあるし。

でも、この世界と私のいた世界でまったく同じものだとは考えられない。私が変に覚えてる可能性だつてあるし・・・・。

「契約は、統治者と精霊を繋ぐためのものです」

やつぱりちがつたか。

「その・・・繫がりを、精霊たちが切つたの？」

契約を一方的に破棄するのは、裏切りの行為。

他の精霊たちにはまだ会つてないけど、私の知つている精霊・・・ウェントウスが、繫がりを切るとか・・・そんなことをするとは思えなかつた。

破棄したつて言う契約が、簡単な優しいものなら子供心にやつちやうこともないとは言い切れないかもしけないが、フイーリアの口調とこの話の流れから契約がどれほど重いものかつてことが分かる。

・・・・そんな契約だから、破棄するのにも相応の何かが必要つてことだよね。

それを本当に精霊たちが？

何かの間違いつてことは無いの・・・?

「契約を破棄するには、契約の際と同じように儀式をしなければなりません。それ以外の方法で破棄をするのは容易なことではありません。相応の強い力と意思を必要としますし……。契約を無理に破棄したことによる精神的なダメージも相当なものです」

精神的な・・・ダメージ・・・。

私は思わず右手を強く握り締めて胸に当たった。
フィーリアの言う精神的なダメージが、どれほどものかは分から
ない。
だが、簡単に直るようなものでは、きっとない。

す』く重いものだと思う。わかんないけど・・・。

「精神的ダメージってどれくらいなのかな？」

「今回のことはいままでにはない異例のことです。ですから、はつ
きりとしたことは分かりませんが、契約の破棄に生じるものですか
ら強いものだというのは確かです。もしかしたら状況や力によつて
多少の差はあるかもしれませんが・・・大きな差はないはずです」
「そんな大きなダメージを、精霊たちが・・・、耐えられるの?」

ゆつぐりとフィーリアは首を横に振った。

「通常なら、耐えられるものではないと思います。優空の考えてい
るものよりも契約は重く、固いものですから」
「なら・・・!」

私は信じたくない一心だったのかかもしれない。
こんなに小さなウエントゥスが、裏切るようなことをしたかもしれ
ないということを。

だって、あんなに純粋に私の胸に飛び込んできたんだよ？そんな子が、裏切るようなことをするなんて・・・。

「優空、貴女の信じたい気持ちもわかります」

「フィーリアは少し俯きながら静かに言った。

「ですが、契約は契約者しか放棄することはできません。儀式をしていないのに放棄されたということは精霊が放棄したと考えるのが妥当なんです」

分かりますね?と、付け足す。

頭の中の整理がつかず、フィーリアが何を言っているのかさえ理解するのが容易ではなかつたが、私はそれでも一度だけ頷いた。
もちろん精霊を疑つたわけじゃない。

ウェントウスは・・・精霊は裏切り何てしてていない。

私はそう信じてる。

なんで、会つたばかりのこの子をこんなふうに信じられるのか自分でも分からなかつた。でも、隣にいるウェントウスをみれば、そんな気持ちになるのだ。

「安心してください。私はあくまでも可能性の話をしているんです。ですから、ウェントウスには少し質問に答えていただかねばなりません」

フィーリアの目が、再度ウェントウスへと向けられる。

小さく頷きながら、ウェントウスの目は開けられた。その小さな瞳

には少しだけ困ったような感情が宿っていた。

フィーリアは手短に、今一番聞かなくてはならないことを率直に口にした。

「ウエントウス、あなたが契約を解除したのですか？」

その質問が来ることを分かつていたのか、ウエントウスは表情を変えることなくその問いに答えた。

「・・・わからない」

それは蚊の鳴くような小さな声だった。しかし、ウエントウスは何かを隠しているふうではなく、堂々とそう言った。

その答えに、フィーリアは一瞬ひどく悲しそうな顔をした。

でもそれは私の見間違いかと思つぽぞ本当に一瞬ですぐにもとの表情へ戻り、続けてウエントウスに質問をする。

「分からぬとはどういふことですか？」

「覚えてないのです・・・何も・・・」

「覚えてない？」

「はい」

フィーリアの何気に強い口調の問いかけに、ウエントウスは躊躇いなく答えていった。やはりその小さな瞳から困ったような感情が消えることはなかつたが。

「では、どこから覚えているのですか？」

質問の仕方を微妙に変えた。

ウェントウスは少しの間口を開け、考えるしぐさをとった。

「…………はつきりとした意識が戻ったのはレー……優空様が私に力を使つてからです。それ以前のことは長い夢を見ているようじほんやりとしたもので……。その中でも思い出せるのは……」

「

口を閉じ、ウェントウスは顔をゆがめた。

「私が……」「ルや優空様に強い力を使つていたことだけ……」

話を聞いたフィーリアは目をほんのりと見開いていた。
驚きを隠せていないようだ。

「フィーリア……。ウェントウスの言つていることは本当だと思うよ……！」

黒いもやが体内から出て行つた直後の状況を把握していないようなウェントウスの顔。暫くして暗い表情で謝つてきたときの泣きそうな声。

自分の意志で私たちを襲つてたならこれが全部嘘つて事。そうとは思えない。

私の声が聞こえなかつたのか、無視しているのか。フィーリアは変わらずウェントウスと向き合つていた。

その視線はウェントウスを向いてはいたが、見ているかどうかは分からぬ。

考え方夢中になつてゐるようだつた。

「フィーリア？」

「え？・・・あ・・」

私が声をかけると、ハツと我に返ったフィーリアは最後に、今までの話に嘘はありませんね？と問い合わせた。

ウェントウスは頷く。

とりあえず、これ以上のこととはウェントウスは知らないようだった。

誰かを疑うような、張り詰めた空気はフィーリアが質問を終えるとともに少しずつ回復していった。

あとは・・・「コルやウェントウスの言つてた聖地の違和感と、今までの詳細を報告して終わりかな。

フィーリアが本当にウェントウスへの疑いを拭い去ってくれたのか、私には分からぬ。

でも、信じたいつて気持ちは同じのはず。
だから、無意味に大丈夫な気がしていた。

「フィーリア様、俺たちから報告したい」とが

場が落ち着いてきたところを見計らつて、コルがフィーリアにそつと声をかける。

フィーリアはやはり考え方をしてたのか、一瞬反応が遅れたが、なんですね?と返した。

「ウェントウスのいた聖地のことです」

「聖地が・・・どうしたのですか?」

「以前調査したとき同様、聖地の契約も破棄されていくせいで荒れ果てていました」

「はい。それがどうかしましたか?」

「ここへ戻る前に、風の聖地の契約を済ませてまいりました。ですが、聖地は依然変わらぬままです」

風の聖地の契約?

「コルの話を聞いていた私は首をかしげた。

ここに住んでいるコルやフィーリアたちには、それだけでわかるのだろうけど、私は部外者。知らないことが多いすぎる。

「ねえ、コル。聖地の契約って……」

まだどこかに私のどこかに残っている、子供心の単純な好奇心。もちろん、今後のことでもふまえて聞いておきたかったってのもあるけど、このときはどちらかと言つと好奇心での知りたいといつ気持ちが強かつた。

「……」

本当に小さくため息をつくコル。
ひとめで呆れていると言つのがとてもよく分かる。

知らないんだから仕方ないじゃん……！

ふくう・・と、頬を膨らませると、ウェントウスがわき腹をつついてきた。

「優空様、聖地の契約というのは精靈の力を解放して決められた聖地と繋ぐことです。優空様は、私の力を解放してくださいました」

一瞬何のことか分からなかつたが、たぶん、私がウェントウスに向かつて言ったあの言葉のことだろう。私の口から勝手に出たあの言葉が、解放の呪文だつたのだろう。

「それから私が風の玉を渡したでしょう。それを精盤にはめ込みま

したよね？」

「うん」

精盤は私の持つてゐる袋に入つてゐる。

そのひとつに、私は確かにほめた。

「それが聖地の契約です。その土地と同じ属性をつかむべしの精靈と、
守るべき場所を繋ぐものが聖地の契約なのです」

「なるほど・・・」

つこわひき、私がやつたことが聖地の契約だつたんだ。

・・・てことは、あれか。

今回が風の聖地の契約だつたわけで、窪みは後7個あるんだし・・・
・。

危険な田には後7回あつゝて事・・・?

笑えない[冗談]。・・・[冗談になれば本当にいいんだけど。

「それは確かにおかしいですね」「何がおかしいの? ?」

せつから疑問に思つていていたひとつのこと。

私はこの世界の法則とか、いろいろ知らないわけだからフイーリア
たちが変だ変だといつていふことの、何が変なのか分からぬ。

「ええ。聖地といつのは精靈が守るべき土地のことをさすわけです
が、普通その土地の守護精靈・・・つまり、今回はウエントウスな
わけですが、その精靈と契約を結べば聖地は精靈の力を得て元通り
に戻るはずなんです」

「へえ・・・」

「優空は、壊れかけたこの世界しか知らないからわからないかもしれませんが、聖地というのは元はとても素晴らしい場所なんですね・・・神殿・・・といったほうが、もしかしたら分かりやすいかもしません」

私が知っているのは、たくさん柱が破壊されて自然なんて何もないような荒れた場所。

だから、フイーリアがいくらもとの聖地が素晴らしいといつてもすぐには信じることはできなかつた。

「それが、契約したにもかかわらず元に戻らないなんて・・・」

眉を寄せて、難しい顔でフイーリアは何かを考えているようだつた。しかし、一瞬体をピクッと震わせたかと思うとすぐに通常の表情に戻り口を開いた。

「これは異例のことですから・・・私たちの知識と多少食い違つていてもそうおかしい」とではありません。・・・戻るのに、時間がかかるつているだけです」

「ですが・・・！」

「あなた達は聖地との契約後、すぐにこひらに戻つてきたのでしょうか？絶対にありえないとはいえないはずです」

コルはなおも言い下がるつとしたが、フイーリアは静かにそれを制した。

「こひなことは、取るに足らない」とです」

その声は、今まで聞いた中で何よりも低く、怒りのような、不安な

よつな、そんな気持ちがこもっていた。

フィーリアは一瞬の間をおいた後、またいつも聞くよつな優しい声で口を開いた。

「やんなことよつ、気になることは・・・。優君、貴女のことです」

第三十八話

「わ・・・私？」

話の丞先が、私に向けられた。予想もしなかったことだ。

私・・・何かしたかな？

怒られるような事何かしたかな・・・？

悲しい性分なのか、私の思考は悪いほうへ悪いほうへと向かって突き進んでいく。

そんな私の心の中をまたも読み取ったかのように、フイーリアは微かに笑つた。

「悪いことをしたわけではないです。ただ、お聞きしたいことがあります」

「聞きたいこと・・?」

いろいろわかんない」とだらけの私に答えられるとなんて何もないと思うんだけど・・・。

「回つぐぞく聞くのはやめます。单刀直入にいきますが・・・」

微妙に浮かべていた笑みが、一瞬にして姿をくらました。

そこにはまだ『威圧』と言つ言葉がふさわしいような厳しい顔が浮かんでいた。

「優空、貴女は聖地の契約前に力を使えたのですか?」

「・・・えつと?」

力・・?

力って・・・最初に言つてた自然の力とか統治者の力のこと?

「とぼけないでください。使えたのか、使えなかつたのか、それだけが私が今欲しい回答です」

厳しい眼差しは緩まない。

信用がないのか、それとも他に思ひことでもあるのか。

「使え・・・ないと、思つ」

うー・・・なんて曖昧な答え・・・。

自分の口から飛び出た回答の不甲斐なさに肩を落としたが、私が出来る回答はまだこのを探してもこのひとつしかない。

「思つとはまだこのことなんですね?」

やはりとこつべきか、フイーリアはそこを聞く。

「フイーリアは、さつきウェントウスが私が力を使つたつて言つたからこいつやって聞いてるんだよね?」

「ええ」

「あれは私自身にもよく分からぬの」

私の正直な返答を聞いて、フイーリアは眉根を寄せて首をかしげた。そしてそれから真相を図りかねたようにコルに視線を移す。それはたぶん、私の近くで私が力を使うのを見ていた人だから。もちろん私の目もついついコルのほうへとすこしつけられる。

「俺もよくは分かりません」

「あつぱりとやうこつた後、ただ・・・と付け加えた。

「あの時、そいつがした行動は、自分自身もよく分かつていいようでした。意識的に使つたといつよりも、無意識に使つたようなものだつたと思います」

「・・・無意識に・・・」

小さくフィーリアが「ルの言つた言葉を復唱した。

何か思うものがあるのだろうフィーリアの顔には厳しさが消えない。暫くその憂いの顔を見ていると、フィーリアは小さな声で私を呼んだ。

「・・・優空」

「何?」

「貴女は力を意識的に使つたのではないのですよね?」

「え・・・うん。なんというのかな、んー・・・」

田をつぶつて必死にあのときの感覚を思い出そうとする。

本当はつこさつ起きこつた出来事のはずなのに、まるでずっと昔に起こつた出来事のように記憶に薄く靄がかかつていて、上手く思い出すことが出来ない。

それでも記憶をゆっくりと手繰り寄せしていく。

「体が自然に動いて、たんだよね。まるで・・・やつするのが当たり前な感じで・・・勝手に・・・」

言葉が終わりに行くにつれて、だんだんと小さくなつていいく。

上手く記憶も感覚も思い出せないから、言い切ることが出来ない。

「・・・わかりました」

何が分かつたのかもちろん私には分からないが、フイーリアの顔に出ていた厳しさが和らいだところを見ると、何か考えていたことが答えへとたどり着いたのかもしれない。

それをまだ納得できていないのか、本当は答えを今でも思索しているのか、厳しさは完全には姿を消れない。

だからなのだろうか。

厳しさを保つフイーリアの表情は答えが見つからずに悩んでいると、いつも、何かに対しての決意のようなものを感じたのは。

第三十九話

私には到底理解できないような何かをフィーリアは秘めている。

そう・・・感じた。

「・・・コル」

「なんですか?」

再び名前を呼ばれた「ルはすぐさま返事をする。

「今から契約を始めます。準備をお願いできますか?」

精霊たちとの契約・・・。

私は特にやることはないかなあ。

「わかりました」

いい終わると、コルは一人で部屋を出て行ってしまった。静かな沈黙が訪れる。重苦しいという感じの沈黙ではなかつたのが少し幸いだつた。

暫くすると、コルが戻ってきた。

手には金色の小さな長方形をした箱を持つて。

「お持ちしました

「ありがと」

その箱を受け取ったフィーリアは部屋に描かれている魔方陣の中心にその箱を置いた。すると箱は音もなく開き、中からは白い光が放

出していた。

白い光はまぶしくて……私は目をしばたかせた。

何が始まるのかなあ……？

……。

たぶん、というか絶対に想像のつかないことだらう。こんな夢みた
いな現実の世界に私の想像力が及ぶとはとても思えない。

「では……ウェントウス。こちらへ」

呼ばれたウェントウスは魔方陣の中央へ近づいた。
そして、フイーリアが次に呼んだのは……、

「優空もこちらへ」

・・・・・私！？

いやいやいや、何で私？

瞳でそう問いかけるも、フイーリアは早く来るようじつだけだ
った。助け舟を出してほしく、コルのほうを見るが　。

「……」

俺は関係ない。というかのようじ、じく自然に顔をそらされてしま
つた。

うう・・・仕方ない・・・。

私はいわれるままに魔方陣の中央へと歩き、ウェントウスと見詰め
合う形で立ち止まつた。

「では、始めてください」

魔方陣の外へ出たフイーリアが私たちに言つ。

「・・・何を？」

「ですから、契約を」

「私が？」

「はい。昔から、私よりもレーギスのほうが精霊たちと心が通い合えていましたから」

いやいや・・・。

私は・・レーギスじゃないし。そもそも、契約のやり方を知っているわけがない。

私がそう伝えると、フイーリアは小さく微笑んで

「大丈夫ですよ。記憶になくても心が覚えているでしょうか？」

そう言った。

もちろん私には意味が分からない。

でも・・・。

無意識に力を使っていたあの聖地での出来事を思い出す。本当に、記憶にはなくともどこかで覚えているのだろうか？

て、あれ？

そういうえば・・・私は力を使ったんだよね。

だけど、フイーリアは最初言つてなかつたつけ？

精霊を起こさなければ力を使えない、って。

私が起^るとかするまでもなくウエントウスは起きてたけど、今の話聞いてるとなんか契約をしなくちゃ力つて使えないみたいだし。

じゃあ、何で？

「始めましょう」

思考をわざわざるように、頭の中にフィーリアの声が響いた。
そのとき、グラリと田の前が回る感覚。

足がふらつき、倒れそうになる体を何とか保ち、私は背を正した。
頭がガンガンとなっている。胸に何かが詰まっているようで気持ち悪い。

吐き気がする。

「・・」

そんな状態でも、私の体は動き何かを言つ。
自分で言つていることのはずなのに、何を言つているのか分からない。聞き取れない。

視界がぼんやりと震んでいく。

右手に痛みが走った。その場所に何かが押し付けられてさらに痛む。

「・・」

足がふらつく。
体が・・重たい。

「・・」

誰かの声が聞こえた。誰の声か分からない。

視界は完全に閉ざされ、私の意識も閉ざされた視界とともに真っ暗になつた。

第四十話

フィーリアが・・・、フィーリア様があいつの名前を呼んだ時何をさせたいのか俺はすぐに分かった。

精靈との契約。

それをさせる気なんだ、と。

無理だ。

俺は本心からそう思う。別に、あいつの力量とかを蔑んでいるわけではない。まあ、力がなさそうなところがあり、俺がいまいち信用しきれないのは否めないわけだが。

ふいに、困惑氣味の顔が俺の視界に入った。

助け舟を出して欲しそうな顔だ。

だが、フィーリア様には頑固な一面がある。俺が何かを言つてもどうにもならないだろ。

「・・・」

故に俺はそっぽを向く。

肩を落とす氣配を感じたかと思うと、その氣配は部屋の中央 魔方陣の中へと向かう。見ると、ウェントウスと向き合つ場所に立ち、フィーリア様のほうを不安そうに見ていた。

・・・フィーリア様は分かつてゐるはずだ。精靈との契約がどれほど精神力と統治者としての力を必要とするか。

俺から見たらあいつには統治者としての力はほとんどない。確かに風の聖地でウェントウスと戦つた時は何らかの力を使つてい

た。何か・・・底力のようなものがあるのだろうが、そう簡単に出せるものではない。

なのに、なぜ？

「大丈夫ですよ。記憶になくとも心が覚えているでしょうから」

なだめるようにフィーリア様は言つ。

何かが変、だ。

いつものフィーリア様ならこんな無茶なことを言わない。
あいつが来てから、フィーリア様の考えは分からなくなつていいくばかりだ。

何か隠してる？

何のために。

この世界を救つてほしくてレー・ギス様の生まれ変わりであるあいつを連れてきたんだ。それなのに隠し事をするなんてデメリットしかない。

だが、前科がある。

精霊のことや、この世界の秩序が乱れた理由を偽りで隠していたのも事実だ。

・・・なぜ？

「始めましょう」

凛としたその言葉にはじかれるように俺は顔をあげ、魔方陣の方を

見た。

つ！？

瞬間、自分の目を疑う。

あいつの姿が、ダブつて見えたからだ。

頭を振つて、もう一度見る。そこにはもちろん一人しかいない。

見間違い、か？

疲れているの・・・だろうか。

俺はもう一度頭を振つてあいつ等の方を見る。

あいつは無表情な顔でその白い右手を動かし、ウェントウスの小さな額に触れた。

契約が・・・始まつた。

「 汝、風の精ウェントウスよ。我是八方の自然を司る統治者なり」

無機質な声がその口から発せられる。

右手が額から離れ、小さな喉元へと滑り落ち、小さく円を描く。

「我ら今ここに悠久の契約を結ぶ」

足元で光を発していた金色の箱から小さな塊が浮かび上がった。それは小さな橢円状の刃物だ。契約時に必要不可欠な聖具・・・キルクルス。

「契約の証を」

ウェントウスから離れた右手が、戸惑うことなくキルクルスの刃に人差し指を走らせる。深く切つてしまつたのだろう。白い手は流れ出る赤に見る見る染まつていった。

それを見てからウェントウスも同じように自らの手を傷つける。その手から・・・細く白い血が流れ出す。

互いにその血を一滴ずつ箱へと落とし、向き直り・・・赤い血の流れる手と、白い血の流れる手が重なり合つた。

契約の証は・・・互いの血から作る混血。

「汝、我と契約を終え、その力ここに宿す」

ウェントウスの体が淡く光る。その光が完全にウェントウスの体を包み込み・・・その光ごと背後にあつた柱と溶け合つ。黒く濁っていた柱の上の水晶は風の聖地と同じ色で遙かに強い色を灯した。

・・・契約が・・・終わった。

本当に、契約が出来た。あいつに。

一部の狂いもなく、完璧に。

まるで・・・最初から全部理解していたかのようだ。

本当に、体が覚えておたどりうか？レーギス様であつたときのこと？

「

そのとき、今まで平然と立つていたあいつの体が揺れ・・・足元から崩れ落ちる。

「おひつ……」

その体を何とか支える。

支えたその体は微動だにしない。気を失つていいようだった。
動かないその手から流れ出る血はどうまることを知らないのか俺の
服とこいつが着ている服を染めていく。

「……フィーリア様。貴女は何を知つていてですか？」

背後に立っているフィーリア様に問いかける。

何を戸惑つたのか、俺の声はかすれて小さな声しか出なかつた。俺
の言葉がフィーリア様に届いたかは怪しい。

「……コル、優空の手当てをお願いします」

やつぱり届いていなかつた、のか。

間をおいて言うフィーリア様にそう納得し深く詮索はしない。聞こ
えていたとしても、答えることがない、といつことが俺の質問への
答え。どうせ答えをもらえないのなら、聞こえなかつたと解釈をし
たほうが……フィーリア様に必要な不信を抱かなくてすむ。

「わかりました」

俺の腕の中に身を沈めている体をそっと抱き上げる。魔方陣の外へ
置かれている二つのバックを拾い上げ静かに部屋を出た。

第四十一話

+++

体が・・・重い。

真つ暗らな視界でそれだけを感じ取る。腕や足が鉛のように重く、自分のものではないのではと思つほどに動けりつとしない。

私は今どこにいるの？

その疑問にたゞり着いたとき、初めて自分が目を瞑つていたことに気づいた。

閉じていた目を・・そつと開ける。

途端にまぶしい光が目に差し込んできた。

そこは、見覚えのある部屋だった。無駄のないその広い部屋の中央には8つの柱が立ち、その柱に囲まれるようにして床に魔方陣が描かれている。

私はその魔方陣の中心に何をするでもなく、ただ立っていた。

・・・なんで私はこんなところに？

部屋に視線を這わせながら考える。

この部屋に来た経緯が思い出せない。

そもそも、頭の中が真つ白でしつかりと考えることさえ出来ない。

もう一度私は今いる部屋を見回す。

8つの柱にはそれぞれ鮮やかな色のついた丸い水晶が乗っかっている。その光はとても綺麗で優しく、儂かつた。

重たいからだが一步前へと歩き、一本の柱へと向かう。

だが、柱に到着する前に私の足は足元にある何かに躡いてしまった。やわらかいそれに足元がふらつき、ただでさえ言つことを聞かない体はひざから折れ、私はその場にぺたりと座り込んだ。

カシャン・・・

同時に隣で何か硬いものが落ちる音が聞こえた。

何の音だろ？

首を首のした方へむけ　　息を呑む。
そこにあつたのは、見覚えのない純白の剣だった。それだけなら、まだ良かつたのかもしれない。

すぐそこに落ちて いるその剣の刃には、真つ赤な液体がついていた。わざわざ確かめるまでもなく、血だと分かった。

何・・これ・・・なんで・・・！？

恐怖から来る力を利用して、重い体に鞭打つて剣から多少距離をとる。そのとき、やわらかく温かな物体に手が触れた。先ほど私が躡いた、何か。

何かを考えるよりも先に、顔はそれを見ようと動く。
そこについたのは　　。

「・・・・ついやああああ

絶叫。

幼い頃、ジョン・ヒュースターのつて騒いでいたような優しいものじゃない。

自分のどこからこんな声が出るんだらうと黙つくりこし、それは鋭いものだった。

それほどに、目の前にあるそれは衝撃的だった。

これは・・・なに？

喉が潰れるのではないかと思うくらいの悲鳴を上げながら、でもどこか頭は冷静にそれを観察する。

いや、本当はそれが何か分かっているのだ。

それを理解できない頭は、もはや冷静さを失っているのかもしれない。

私の見つめる先にあつたそれは二つの物体だった。

一つは、金色の髪を腰までたらした女性。

もう一つは、青い髪をした男性。男性はまるで女性を庇つように女性の上に倒れていた。

見覚えのあるそれは、赤く染まっていた。

何なの・・・? これは、何?

信じたくない、認めたくない。

もはや悲鳴は止まっていた。目の前のそれを拒絶する」とこのみに脳が働きかけていた。

ギイイ・・・

そのとき、扉が開く音が聞こえた。

弾かれたように顔をあげる。

そこにいたのは、黒髪の少年。

部屋の中を見て息を呑んでいる少年に声をかけ
疑問に思つ。

誰、だつけ。

知つてゐるはずなのに、名前が出でこない。

「おい・・・つ大丈夫か！？」

少年は声を荒げながら駆け寄つてくる。私に傷がないことを確認する
と、そばにあるそれに向ける。その顔が、すぐに歪んだ。
何を思つてゐるのか、私には分からぬ。

「なんで・・・こんな・・・誰がこんなことを…？」

それは私に問い合わせられた質問。

そう、私に。

私・・・？

私は・・・誰？

「優空は・・・見てないのか！？」

優空。優空？

私の名前・・・？

。

違う。それは私の名前じゃない。
私は優空ではないわ。

「優空」

「違うわ」

私の右手が、何かを握つて斜め左上へと持ち上がる。
途端に、降り注ぐ 赤。

手に納められていたのは・・・赤い純白の剣。

少年の顔が、信じられないとも言つかのように見開かれる。
少年の名前、今なら簡単に思い出せる。

「ばあいばい。コル」

息のあるそれに向かつて、私は持ち上げた右腕を下ろした。
目の前はただ、赤に染まって

第四十一話

+++

「…………」

柔らかなベッドの上で私はガバッと飛び起きた。

初めて経験する異様な目覚め。

すでに頭は覚醒していて、心臓は痛いくらいにひたむかへ鳴っている。

・・・なんか、嫌な夢を見た気がする。

体はぐっしょりと汗をかき、カタカタと震えていた。

何の夢を見たの・・?

私は嫌だと思いながらも、今見た夢を思い出そうとした。なにか、大切な夢のような気がしたからだ。

だが、どんな内容の夢であつても、それを夢だと認識してしまえば全てが霞んでいつてしまう。

私は結局夢の内容はまったく思い出せなかつた。

ただ分かることは、とても嫌な夢だつたということ。

「・・・はあ」

ため息をついて、右手で頭を押さえる。

「・・・」

右手に痛みが走った。正確には、右手の人差し指に。

暗い視界の中で田を凝らすと、痛みが走った人差し指には巻きつけられた包帯が見える。

・・・覚えのない、傷。

私・・・何かやつたつけ？

記憶をたどってみるが、何かがあつたと思われる契約の記憶がどうもあやふやだ。

ただ、なんとなくこの傷は契約のときについたんだなと頭は理解していた。

「・・・って、あれ」

そういうば、ここはビーム。

私は確か・・・魔方陣のある部屋にいたはずなんだけど。

闇に慣れ始めた目で辺りを見回してみると、少しだけ見覚えのある部屋。

本棚やタンス、ランプなどの一般的な生活用品が置かれている here は、紛れもなくコルの部屋だった。

何で私はここに・・・。

いや、まあ部屋の準備が出来るまではコルの部屋に寝泊りつてことになつてはいるけど。

ここに来た覚えなんてないんですけど。

でもなんとなく予想はつく。契約が終わってからか、契約の途中なんか。とにかく私はきっと倒れたんだ。それをコルがここまで運ん

でくれたと。つてことは、手の傷の手当でもコルかなあ。
慣れているのだろうか、包帯は綺麗に巻きつけられていた。

ホント、何でもできるんだな・・・。
なんか悔しい・・・。

負けず嫌いな性格が、コルができることへ悔しさを感じたが、私は怪我の手当でなんて到底出来やつも無い。
こひな諦めてもう一度眠りにつくことにした、のだが。

「この服どうにかならないかな・・・」

自分の汗で濡れた服を襟を掴みながらため息をつく。
濡れた服で寝るなんて、気持ち悪すぎる。それに、明日コルに何を言われるか分からぬ。

そうこえは、コルはベッドにいるんだろう。

とりあえず、ベッドの上で寝ているのは私だけのようだ。

じゃあ、この部屋の主はどうだ・。

キョロキョロと見回すと、ソファの上に何かの塊を見つけた。微かに上下に動いているそれはたぶんコルだ。私をベッドに寝かせて自分はソファへいつたらし。

さすがに、倒れただろう人をソファに寝かせるほど意地悪ではないようだ。

足音をたてないようにしてベッドから抜け出して、細心の注意を払いコルへ近づく。

コルは毛布のような布に身を包ませ、スースーと寝息を立てていた。

目をつぶったその顔は少女のよつに可愛らしかったが、隠し切れない疲れが伺えた。

「まー・・・。よく寝ていいことで・・」

咳いてから、ブルッと体を震わせる。

濡れた服が空気に当たって体温を下げにかかりていた。

普段から私は健康なほうで、風邪なんてひいたことは無い。だが、こういう精神的にも結構弱っているだろう場面では健康を損なう可能性もある。

どうしたものかと考えていると、この部屋にシャワーがついていると説明されていたことを思い出す。

確かにこの部屋の奥へ入つて右側だった気がする。

同時にタオル等がある場所も言っていたと思ったのだが・・・説明なんてほとんど聞き流していただせいとよく覚えてない。

んー・・としあえず洗面所にいけば良いよね。

そこに洗面用具一式そろつてれば良いんだけどなあ、と考えながら、コルのそばを離れ私は洗面所へと向かった。

第四十二話

洗面所と思わしきドアを開けると、まず目に飛び込んだのは真っ暗な闇。

手探りでスイッチを探そうと足を踏み入れたとたん、いきなり明かりがついた。上を見ると、鈴蘭のような形をしたランプが光っていた。

私スイッチ押してないよね？

入り口近くの壁を見るが、そもそもスイッチらしきものがまず見当たらなかつた。

センサーか何かかもしれないし、光がつく原理とかもこの世界では何か違うのかもしれない。

私はランプから田を離し改めて周りを見回す。

そこはやや広めの真っ白な清潔感あふれる場所だった。近くにある籠の中にはタオルの類が置かれており、ここが洗面所に間違いはないようだ。

見ると、奥にガラス張りのドアがある。
あそこにシャワー設置されているのだろう。

「綺麗なところだなあ・・・」

思わず声が漏れてしまつ。

なんかホテルみたい。私の家とはまったく違う・・・。

だけど、建物の外見がお城の場所にこんな普通の洗面所があるというのなんか意外だなあ。

もつとお城という雰囲気の豪華なものだと思つていたんだけど。こ

れが普通のなのかな。

・・・まあ、このお城つて世話をとかに出てるよひつな豪華な感じじやないもんね。

別に悪い意味ではない。

無駄が省かれて、清楚な感じが良いと思いつのだ。

いろいろと省かれすぎていて子供の夢を壊しそうなのは確かなのが。

「お風呂つてどうなってんだろ?」

私はガラス張りのドアへと目を向ける。

汗でべとべとの体をどうにかするためにシャワーは絶対に浴びたいが、出来ればお湯にもつかりたい。いろいろとあつたせいで忘れていたが、昨日はお風呂に入つてないどころか体も洗えていないわけだし。

普通の浴槽があればいいんだけどな・・・。

少しだけ、ほんの少しだけ期待をしながらガラスのドアの前に立つ。中を確かめようとドアを開けようとしたのだが、取っ手らしきものが見当たらない。

取れたような後もないし。最初からついて無かつたことかな。ていうかどうやって開ければいいのか。

「コル叩き起こしてやるつか・・・

・・・やめよ。後で何されるか分かったものじゃないし。

でもどうしようかなあ・・・。最低でもシャワーは浴びたい。

腕組をしながら考えていると、ガラスのドアに細く引つかき傷のようないいのがついているのを見つけた。

何これ？

近づいてよく見ると、それはもう何度か田にした魔方陣だった。中央に一つと四隅に一つずつ描かれたその魔方陣はこの部屋の扉にあつた魔方陣と同じものだった。

確かに結界がどうのと言っていた気もするが、ここまで何個の描かれていると神聖なものではなく一種の飾りのように見えてしまつ。

部屋にはこどもをして、『ルはここ』を呟いてたよねえ。

その姿を思ひ出しながら、同じよひこどりを呟いてみる。

「コツコツ」と硬い音が響き。

何の前触れも無く、突然目の前からお風呂場と洗面所を遮断するガラスが消えた。

・・・あ、開いたつてことになるの。これ？

まったく、いつたいどんな仕掛けなんだか。

この世界に来てまだ2日しかたっていないはずなのだが、その短時間の中でいろいろと私の世界ではありえないようなことを見せられてしまつたせいできほど驚くことはなかつた。

・・・この世界の景色は今のところまったく変わつていないので、

本当に2日経つたのか怪しことこいろだけビ。

消えたガラスのドアの向こうを覗き見るとタイル張りのお風呂場だった。

しかもかなり広い。

服を脱ぐ前に浴槽やシャワーの確認をしようとしたお風呂場へ移動すると、消えていたガラスが現れ、また洗面所とこの場所を遮断する。

あー・・。なるほど。

ガラスは誰かがそこを通つたら戻る仕組みになつてゐるんだ。あたりまえか。消えたままじゃお風呂はいれないもんね。気にせずに入る人もいるんだろうけど・・・私にはそんな羞恥プレイ絶対に無理だな。そんなことを考えながら浴槽などを見たが、特別おかしいところはない。大きさを除けばいたつて普通のものだった。何故か浴槽にお湯が張つていあつたが、・・うん。特別気にすることでもないだろ?。

「じゃあ、入ろうかな。寒くなつてきたし」

私はもう一度洗面所に戻り、服を脱ぎだし　　はたとその動きを止める。

最初は気づかなかつた・・といふか、氣にも留めなかつたのだが鈴蘭ランプのしたには大きな鏡が設置されている。

そこに服を脱いでいる自分の姿が映つているわけだが。

問題はそこではなくて、今私が着てゐる洋服にある。

・・・なんで、服が変わつてゐる。

もちろん着替えた覚えなんて無い。なのに服が変わっている。

誰が服を変えたの。

・・・ フィーリアだと思いたい・・・ けど・・・。コルのやへにいるわけだし、手当てもたぶんコルがやつたんだから。

。

・・・ うん、深く考えないことにしよ。それが一番だよね。うんうん。

私は鏡を見なじようにして止まっていた手を動かした。

服を脱いだ私は浴室に入った。

タイル張りの浴室は誰が掃除をしているのか、真新しい輝きを持っている。汚れているところも見当たらなかつた。

私はお湯の張つている浴槽に左手をそつとつけた。熱すぎるわけでもなく、ぬるすぎるわけでもない。人肌よりちょい上くらいの丁度いい温度だつた。もしかしたら、もっと熱いお湯につかりたい人だつているかもしぬないが、私にはこれくらいのぬるま湯が丁度いい。

「セーーと。お湯につかる前にシャワー浴びたいなあ」

お湯から手を離し、タイル張りの壁をザツと見渡す。

・・・シャワーが設置されてないんですね？

あ・・・あれー？お風呂ついて、シャワーがつき物じゃないのー！？

とゆづか、私もさつも気づけばよかつたんだ。

シャワーと浴槽を確認したとき、タイル張りの広い室内とすでに用意されてあつた浴槽のせいで気が回らなかつたが、シャワーを田にてした覚えが無い！

因みに言つと、お風呂とかで私が使つ一般的な道具が見当たらない。どうなつてんだこいつはー

「えー・・・。ひょー、どうあればっこの一ー？」

とりあえず、寒い。

裸だし、空氣乾燥してゐるし。だけビ、お湯を浴びる前にお風呂に入

るのはなんか嫌だ。でも、お湯をすぐつ方法もないし・・・。

どうしようかな。

本気でコルをたたき起こしてやるつか・・・。

腕組みしながら考へること一瞬。ふと顔をあげた先にあるタイルが他のタイルと色が違つことに気づいた。
いかにも何かありますぜ！って感じの雰囲気がそのタイルから漂つていてる。

こうなつたら確かめるしかないよね！

私はちよつとした好奇心と、できればシャワーとか何らかの装置であつて欲しいという期待でそのタイルに触れた。

ピッ

小さくなる機械音。

え？、と思う暇もなく、浴室のあちこちからお湯が降り注いできた。
お湯、といふか、細かい霧のよつた無数な粒が私に向かつて落ちてきていた。

その感触は洗いたてのタオルにくるまれているよつた・・・いや、
もっと柔らかい雲に抱かれているよつた氣分だ。
雲に抱かれたことなんて無いけどわ。

微かに石鹼のにおいのするそのお湯は、私の体の汚れを落としていく。抱え込んでいたものも、少しだけ削られていくよつた感がした。
すく安心して、本当に無意識に口が動いた。

「・・・・お母さん・・・」

口から漏れたその言葉に、私は酷く後悔した。
あんな天然なお母さんだけど、あの人は私の大切な人で。だけど、
今度いつ会えるのかわからなくて。

・・・・会いたいよ。

こんなこと思つても、仕方がないのに。
私は、頭を振り、無駄な考えを振り払つた。この世界を助けたいと、
一度思つたんだから今更帰りたいと駄々こねることなんて許されない。

なんとしても、やるべきことを終わらせなくちゃね。

私は自分に言い聞かせるように胸を叩いた。

「いつた・・・」

叩いた瞬間、握り締めた右手が痛んだ。見れば、そこには白い包帯。
そこからじみ出る赤いもの。どうやら、傷が開いたみたいだ。

「傷つて、血が出てるの確認しちゃうと痛く感じるんだよねえ・・・

」

もちろん私も例外じゃない。

ジンジンと痛くなってきた。

包帯もお湯に濡れてびしょびしょで、傷をふさぐ役目をすでに果たしていない。このままお湯にあたつていたら、血が流れ出して指を染めていくのも時間の問題だろ？

あー・・仕方ない。出るかあ

ちょっとだけ名残惜しい。私この装置気に入ったのにー···。

しかし、血を垂れ流しのままにしておくわけにもいかない。しぶしぶ私はこの降つてくるお湯を止めるためにタイルに触れた。降つてくるお湯の量は次第に少なくならない。

「え？あれ？なんで？？」

タシタシタシッ

慌ててタイルを平手打ちするが、変化無くお湯は降つているままだ。なんで！？

ペシペシペシペシペシッ

わっわよつも早く叩く叩く。

だが、それでも変化が無い。お湯は同じ量、同じ強さで降つてきている。それと、叩いたせいだろうか。どこからか·····というか、ガラス戸のあるあたりから冷たい空気が流れ込んでいる。振動が何かであつちがあいてしまったのだろうか。

そんなに強く叩いた覚えないんだけどなあ。

特に氣にもせず、タイルを叩く。もしかしたら叩き方に問題があるのではないかと思い、あらゆる角度からタイルに攻撃を繰りかえす。

「·····や」「じゃない。右側の壁のタイルだ」

「右？」

見てみると、右側にも色の違うタイルがあるのを発見した。触れてみると、すぐに降つてくるお湯は勢いをなくし、すぐに止まった。

「あー。やつと止まつたよー」

ありがとー！

と、言おうとして、止まる。

私つてば、誰にお礼なんていおつとしたの？いや。そりや、タイルの場所を教えてくれた人についてことは分かつてるけど。教えてくれた人つて誰よ？

こここの部屋には・・・私と、もう一人しかいなかつたわけであつて。恥ずかしい思いを飲み込んで、振り返る。

そこにいたのは呆れ顔の顔をしたコルだつた。
顔を赤らめることなく、ただ呆れた顔。乙女の裸を見てるんだからもつと顔赤らめろよ！とセルフ突込みが出来るほどの落ち着きようでこっちを見ている。

・・・セルフ突っ込みのおかげで再確認したわけだけど。

私つて、いま裸なんだよね？

そんでもつて、コルのほうを見てるんだよね？

。

どうする私！－！

この状況どうするよ！－！

今までで一番ピンチなんだと思つんだけど－。いろんな意味で・・・
！－！

考えてこの状況を抜け出す策は出でこない。こんな見つめあいながら考てる時間があるならコルの脇を通つておいてあるタオルで体を隠せばいいのにとも思つがそんな考えがバツとでるほど私の頭は冷静ではない。

結果。

その頭で導き出した答えが。

「こつまで見てんだ——————っ！」

バチンッ

渾身の力でコルの頬を叩くといつ、後々恐ろしことなるに違いないものだった。

+++

「 いつたつ

「 我慢しり」

思わず引っ込めそうになつた手をコルは容赦なく引き止める。手首を握り締めてくる力が地味に痛い。

その後・・・お風呂場からなんとかコルを追い出し、私は置かれていたバスタオルで体を巻くことに成功した。不思議なことにお湯で体と一緒に濡れたはずの髪は半分乾いていた。ので放置。

バスタオルを巻いたはいいが、着替えがないことに気づき外にいたコルにひたすら謝つて着替えを用意してもらつて、今はベッドの上。取れてしまつた包帯を巻きなおしてもらつていい。

因みに、コルの用意した着替えはやつぱりシンプルなデザインで白やクリーム色がメインのワンピースだった。この城は薄い色が好きなのか、こんな色のばかりなきがする。

ワンピースの他に渡されたものは・・・そう、下着。

いや、下着がないと困るのは私だけどね？

「 そついえばわあ

「 何」

黙々と手を動かしてこるコルに自由になつてこる左手の腕を眺めな

がら問う。

「全然氣にしてなかつたんだけさ。私つて、あの・・・ウホントウスの一件で結構怪我してたよね？全然その形跡すら見当たらないんだけど」

「まあな。俺が手当てしたわけだし」「は？」

「指の手当て売」。もう外すようなことすんなよ

そう言つて、部屋の明かりを消しもとこたソファに寝ついていくコル。お風呂場でのドタドタで忘れていたが、今は私の世界で言つ夜中だ。時間がずれてるとか言つてたし、風景も変わんないから確信はないわけだけど。

考えている間にコルはさつさつソファに横たわり、寝息を立てようとしていた。

「ちよ、ちよと待つてよー。怪我手当てしたって向せー。」「ああ？」

怒つてゐる・・・寝るの邪魔すんなオーラがひしひし伝わってきてるよー。」「

「いや、だから。『ルが怪我手当てしたつて・・・。まあ手当てした怪我自体ないじゃん！』

「怪我残すなんて無能なことはじねーよ。あんな擦り傷くじこ、今ある力でどうにかなる

「神官の？」

「ひい

本当に眠いのだろう。

短く言葉を切った後に、コルは小さくあくびをした。コルにとっては、私のせいで安眠を妨害されたものだから、早く眠りたいのかもしれない。

眠いおかげで、ひっぱたいたことをコルに強く責められなかつたのはラッキーだつたけど。

「じゃ、この手の傷だつて治しちゃえればいいじゃん!」

簡単には寝させないと、私意地悪だなあ。

面倒くさそうに私を睨みつけたあと、疲れたよつて顔を瞑り眠そうな声で言った。

「儀式の聖具でつけた傷は今の力じゃ無理だし、神官の力が戻つてもどうにかできるものじゃない」

「これって、やっぱり儀式のときについたやつなんだ」

「覚えてねえのかよ。・・・やっぱり・・・」

「え? なに? ?

「・・・・・」

小さく続けられた言葉は何だつたのだろうか。

あまりにも掠れて聞き取ることができなかつたため、聞きなおそうとしたが、これを発した本人はすでに小さく寝息を立てていた。

「もー・・・、ん・・・、ふああ

私もちよつと眠いかなあ。

眠りたいという生理的欲求には逆らえず、私はその場に崩れるよう

にして座り込み、もたれかかるよひとして伸び眠りの中へと引き込まれていった。

第四十六話

+++

優空

どこかで呼ぶ声が聞こえる。

聞き覚えのある声。ううう。聞き覚えのあるなんでもないじやない。

この声は・・・。

。

何・・・聞こえない。

。

「ん・・・」

薄つすらと目を開けると、皺になつた白いシーツが視界に飛び込んできた。私の部屋のものではないことはもう理解している。

私はその場で何度も瞬きをして、ゆっくりと体を起こした。まだ寝ぼけているせいか、頭の中がぐるぐるとしていて、気を抜いたらまた夢の中に連れて行かれそうだ。

「んー・・ふああ・・・」

両腕を上に上げ、体を伸ばす。ぽろりと口からあぐびが漏れた。

「起きたか」

ソファの方からコルの声が聞こえた。コルは昨日と同じく髪を縛つていて、昨日持つていったバッグの整理をしているところだった。一箇所だけエメラルドグリーンに染まる精盤がチラリと見えた。

「早くお前も仕度しろ。フィーリア様が待ってる」

「あ、うん」

促されて、私はベッドから降りて用意されていた服を着る。昨日来たのと同じようなワンドピーースタイプの服。コルも昨日と似た服を着ているから、どうやらこの服はこの世界で何かをするときの服装らしい。

着終わると、コルと一緒に食堂へと向かった。

すでにセルによって食事が準備されており、各々席についてそれを食べ始めた。

全員の食事が終わったところで、フィーリアが口を開いた。

「昨日はお疲れ様でした。特に優空には、大きな負担をかけてしまつて・・・」

「大丈夫だよ。心配しないでっ」

悲しげな表情をしたフィーリアに、私は慌てて言った。

契約を任命されたのは確かに困ったものの、倒れてしまつて逆に迷惑をかけてしまったのだから、お互い様だろ？
そう言うと、フィーリアは微かに笑つた。

「そういえば、今日はどの精靈に会いにいくの？」

「今日は精靈の元には向かいません。一度契約をしたら、三日間の時を刻まなければ契約を行うことが出来ませんので」

「契約せずに、精靈だけつれてくることは……」

「出来ないな。聖地との契約だって、同じだけ時を刻まなければ無理だ。お前が唱えた力の解放の呪文も時と刻まなければ使えない」

ていうことは。

三日間は、何もすることがないってこと？

じゃあ、その間は私の必要ないわけで……家に帰してくれたりは……

チラリ。

横を見ると、見たことを後悔するくらいの冷たいコルの視線が私を出迎える。

ですよね……。

はあ……。

私は心の中で深くため息をついた。

「それじゃあ、これから三日間は何をするの？」

「貴女には、ウエントウスの力をマスターしてもらいます」

・　・　えーっと。
・　・　はい？

「ウエントウスとの契約が終わつたため、風を操る力が私たち統治者に使えるようになったはずです。・　・　このように

フィーリアが片手を前へと差し出すと、その手のひらの上に小さな竜巻が起きた。竜巻自体は小さいものの、そこから吹く風は結構強い。

あんなものが、私にも出せるのだろうか？

「私は操り方をわかつていますから。優空も力の操り方を学べば使えるようになるはずです」

「でも、」

「悩んでいる暇などありませんよ。これから先は、必ず統治者としての力を使わなくてはいけなくなります。精霊の中で一番温和なウエントウスでさえ、二人に襲い掛かったのですから」

少しだけ厳しくなった口調が、私の様子を伺う。

悩むことは時間をすり減らすだけだ。選ぶ答えはすでに一つしかないのだから。

第四十六話（後書き）

この小説はこのままの書き方でいきます（・・・・・）キリ
読みづらかったすみません（・・・・・）

第四十七話

しぶしぶながらも、フイーリアの言葉を了承した私が連れてこられたところは、その城の地下室だった。もちろん窓も無いし、見たところ電気のようなものも無かつたのだが、昼間のように明るい。

当たり前か。お城 자체が光つてゐるようなものだもんね——」。
まあ、例外な部屋はいくつかあったけど。

私はその地下室に足を踏み入れ、ぐるっと見回してみる。
こんなに必要なのかといふぐらいにそこは広かつた。学校の運動場くらいだろうか。それともお城の地下室はもともとこんなものなのだろうか。

「では、優空。とつあえず竜巻を出してみましようか」「えー・・・。竜巻ってとつあえずで出るの?」「いけるはずですよ」

はずつてなんだはずつて——

うー・・・でも、仕方ない・・・。

「どうやって出すの?」

「まず手を開いて前に伸ばしてください」

「うわー」

右手をいつぱいに伸ばして、手を開く。私の視界には右手の甲が見えていた。すつといつぱいに手を伸ばしているため、腕がつりやつた。すでにぶるぶるしてきていた。

「力入れすぎだ。もっと抜け

「いたつ」

横で私たちを見ていたコルが、べしと私の腕を叩いた。
この人の辞書には女の子に優しくするという言葉は存在しないらしい。
・・・いや、フィーリアも女性だからそれはないか。
しぐするといつ言葉が存在しないんだな。きっと。

でもおかげで丁度いいくらいに力が抜けたと思つ。

「ルのおかげじゃないもん。絶対！

「これで、どうするの？」

「手のひらに風が集まるイメージをして、呪文を」

「呪文？」

「はい。見てくださいね」

フィーリアが私に言つたように手を広げて前へ差し出した。

「風の精霊よ汝の力を解き放き我の力となれ トウルボー」

フィーリアがいい終わつた直後、差し出した手のひらの前にどこから吹いてきているのか、風が集まり渦を巻きだした。
それを確認してから、フィーリアが前に出した手を素早く高く掲げる。

すると渦を巻くスピードが上がり、地下室中に強い風が吹き荒れた。

ちよつ、ちよつ！－ これスカートなんだけど！－

必死ではぱたぱたと揺らめく裾を掴み、竜巻を見つめる。やつま食堂

で見たものとは比べ物にならないくらいに大きくて強い。

これに当たつたら一溜まりもないような気がする。これを精霊たちに使っても、本当に大丈夫なのだろうか。

ふいに竜巻の威力が弱まり、最後に冷たい風がまわりに吹いて消えた。

地下室は何事も無かつたように静まり返る。

「こんな感じです」

「こんな感じって・・・」

やつぱりこここの住人とはちょっと考え方というか、いろいろずれている気がしてならない。逆にコルたちから見たら私のほうがよっぽど変なんだろうなあ。

・・・はあ。

心でため息をついた後、両手でぺちぺちと頬を叩く。

よし！

私は右手を開いて前に差し出した。

一回深呼吸をして程よく方の力を抜き、手のひらに風が集まるイメージをする。なんだか手のひらが涼しく感じた。

「風の精霊よ汝の力を解き放ち我の力となれ　トウルボー！」

。

「　「　「　・　・　・　「　」」

・・・あ・・あれー?

ぴしつと伸ばした手のひらの先には何も出でこない。

フィーリアの出した大きな竜巻どころか、小さな竜巻も、そよ風すらも出てこない。広い地下室中になんとも微妙な空気が漂い始める。

誰かに助けを求めるものの、あんなに真剣にやつて結果がこうなると、恥ずかしくて誰にも田を合わせられない。

というか、空中に伸ばしたままの手をどのタイミングで引っ込めればいいのかすらわからない。

「・・・優空。やっぱりまだもつ少し慣らす時間が必要みたいですね」

「そーですネ・・・」

伸ばしていた手は力なく落ちた。

本当に私なんかにそんな自然の力なんて使えるのだろうか。絶対に無理な気がしてならない。

「コル。少し本氣で優空の特訓をお願いします
「わかりました」

しかもなんか二人は私が落ち込んでいる間に話を進めてるし。

・・・つて!

今、少し本氣とか、特訓とか、あんまりいい響きじゃない言葉が聞こえた気がするんだけど・・・!?

「それでは優空」

「なんでしょう」

「今日から三日間、頑張つて下さいね」

「特訓ですか
「特訓です」

そういうつて笑つた後、フイーリアは地下室から出て行つた。精靈の力はまだ全部は戻らないが、統治者の力を使って少しでもこの世界が保てるようバランスをとらなくてはいけないらしい。

フイーリアの後姿は入ってきた場所に消え、入り口はゆっくりと口を開じた。地下室に残つたのは、笑顔で地獄に落とされた私と、口だけだ。

少し本気でとか言つてたし、これから三日間もいじめのような特訓があるのかと思つと・・・ねえ。

「それじゃあ、はじめるだ
「おおー・・・」

地下室の中に、きびきびとしたコルの声と力の無い私の声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393m/>

異世界

2011年8月21日17時36分発行